

則」と云ふ表現を要求することをしないがスペンサーの社會物理學を想ひ起させる。十七世紀の自然法の學說に到つて漸く斯種の認識は「法則」と云ふ名稱を受けとりそれによつて當時既に高く評價されてゐた自然科學の階列に高められた。

自然法の時期の認識目標は理性に從つた・人間の本質に對應せる・社會形態の觀念、社會の「エンテレヒー」である。一般人間理性の假定に對應して社會靜學が前面にある。即ち自然的社會の構成法則、自然的財貨價值の法則、國家契約に就ての學說、等がそれである。社會科學の此の時期の法則は正しい關係フエルハルテンの規則である。たゞ孤立的にのみ例へば穀物價格變化のキングの法則ベティの統計的經濟學、マンダヴィユに於ける利己主義の原則の社會心理學、モンテスキューの環境說と云つた様な社會學の新しい觀察の仕方への萌芽が見出される。

——社會的なるものは意識それ自體の觀念によつて規定され、意識そのものの様にその根本形態に於て不變である。歴史は時間に於ける永遠なる觀念の確證乃至段階的充實を與へる。

(b) 歴史哲學としての社會學、思惟過程自體に於ける意識そのものの可變性、歴史に於ける觀念の辯證法を認識したと云ふ事はヘーゲルの功績である。措定、反措定、綜合と云ふ此の變化の法則が社會の發展過程を導く。精神的なるものの生は直線的にはなく上下して

運動する。社會的靜態に對する歴史法則の優越と共に合理的自然法の克服、社會學が始まる。

1 コントは社會の發展が心理的||精神的機構に基礎づけられてゐるのをみる。神學——形而上學——實證科學と云ふ觀念の發展過程は社會的發展を導く。それに對し生物學的環境、社會的競争人口の層ダイヒトは發展の速度に影響するのみ。實證科學への精神の三段階の發展は「社會學の根本法則」である。だがコントは實證主義に到達する事に依て發展を停止せしめた、社會の發展は社會理想の停滯状態に陥り進歩の法則は社會の理想的建設の法則を見捨てる。

2 スペンサーは細胞の生物學的發見(シュライデン) 器官の生理學的分業(エドワード)及び淘汰(ダーウイン)の生物學的發見を直接社會的現象に推移し與へてゐる。社會の構成法則は細胞(個人)の分業的に編成された有機體(社會)への發展の法則によつて、またより高い價值の諸形態の淘汰の法則によつて、規定されてゐる。發展の定式は自然及び社會はつねにより高い器關の完成への過程に從つてゐると云ふことにある。斯くして社會それ自身はより高く分化した自然であり、倫理學はより高い心理學である。理想状態は精神的に完全な自由をもつ肉體的に完全な人間である。

社會を植物體及び動物體の構成及び發展と比することは、リリエンフェルト及びヘルワル

1の社會病理學及び社會治療學の平俗に墮する。グムプロウキッツに於ける社會の人類生物學的及び階級生理學的説明、シェツフレに於ける社會の、生理學的及び精神的に制約された、根本結合及び根本形象の結合は、それよりはましである。

3 經濟的歴史觀、サン・シモンはコントの基礎法則を轉倒した。即ち神學から科學への精神の發展と戦争より平和への政治的體制の系列は封建主義から産業體系への經濟的事情の發展によつて制約されてゐる、社會のそのときどきの構成法則は經濟の發展法則によつて規定されてゐる、と云ふのである。

(c) 認識問題としての社會的合法則性。歴史哲學的社會學はその存立について疑はれてゐない社會法則の内容について問題とする。認識論的社會學は社會科學的認識一般の可能性と構造とを研究する。社會諸科學の論理學に於て自然科學的思惟は社會の諸科學に入り込む、然しそれは、物理學及び生物學の成果を唐卒として社會學の中にとりいれると云ふやうな直接的な形態に於てはなく、法則の内容の相違にも拘らずすべての知識部門に於て認識方法の統一化がなされると云つた形で行はれる。

ジョン・ステュアート・ミルは經驗的法則間、即ちその根據への洞察をしない諸現象の規

則的系列の間に區別を行つた、また規則的系列の「何故なるか」について述べる因果法則の間に區別を行つた。社會諸科學がとりわけそれを問題とするところの心理學的因果惹起は部分原因を孤立せしめるに當り構成要素の複雑性の故に困難を生じ、ために我々は屢々社會的事象の「何故」について立ち入ることを不可能ならしめられる。それ故社會法則には歸納の完全さの程度によつて動搖する蓋然性のみが歸せられる。社會法則の存立は發展の合法則性をも制約する、然しその合法則性の蓋然性はもとの因果法則の精確さから大いに隔つてゐる。社會法則は歴史法則に對して優越してゐる。

オイレンブルクは、例へば動力學の法則の如き例外なく妥當する第一次の抽象法則と、例へば遺傳學の法則の如き區別と比較によつて諸現象の共通の條件を確立する第二次の抽象法則乃至構成法則と、例へば遊星の距離についてのボーデの如き未知の因果關聯への最初の接近にとゞまる具體的な法則とを區別する。歴史法則は一般社會法則の成果に依存し、特殊なるもの (das Besondere) は社會學の一般概念について始めて歴史の對象となると云ふのである。

オッペンハイマーは社會靜學の法則 (價格法則) と、單純な運動學の法則 (例、職業分化

の法則)と比較的靜學の法則(例、經濟段階の理論)とを區別する。

ヴントは社會的合能力の法則(例、人口法則)、社會關係の法則(剩餘價值法則)、社會的對立の法則(恐慌法則)を區別する。

ミル以來次の三つの方向が分裂したが、それは認識論的根本態度についてではなく社會科學的認識が到達しうる歸納の完全さの程度について意見が岐れてゐるのである。

その第一の抽象理論は到達せられた歸納の基礎を以て事象の部分原因を彫琢することによつて本源的因果法則に到達するに適當であると考へる(クルノー)、その度合はさうでないまでもすくなくも一定の變化の結果の方向は與へられる(カッセルの價格法則)とする。

第二の歴史學派は抽象的理論の法則の中に不完全な歸納の性急な一般化をみる(シュモラ)。然し乍ら確かに社會事象の生滅する因果惹起の結果として過去のものとなつた諸の與件から、あらゆる状態に於て狭く限定された一段の發展、社會的新形成の可能性が生じる。歴史的に生成した状態そのものから社會の實際に可能な發展に對する方向の規定が生じる(クニース)。

第三の心理學的方向は、社會的現象及び形象を一つの人間の集團の内部の同種の感覺と意

志形成に還元する。心理的な因果惹起の中には聯想心理學の法則の下に立つ一つの獨立な因果系列がある。マクドウガル、ディルタイ、ベツビヤ、H・マイエル、プリンクマンは、文化形象を複雑した心理的な現象として説明する。ヴント、G・イエリネックは社會的形象を意志形成に還元する。タルドによれば社會的なるものは模倣に存し、ワックス・ワイラーによれば感覺の近似性に存する。ラムプレヒトは社會心理的生活展開の法則について語る。心理分析は社會學に入り込み、フロイドのトイテムの信仰からする國家形成の説明、シュルツの團體 *Männerbund* の理論等は此の方向の社會理論的試みである。

社會的なるものを個人心理學から説明することと相並んでルボンの群衆心理學がある。それは生物學的類比によつて社會的現象を心理學の言葉が總括するのである。

(d) 社會學に於ける認識批判、C・メンガーは經驗的經驗エムピリッシュ・エムピリアルを超える限界效用の法則の必然性と普遍妥當性とをその上にその法則が見出されてゐる認識の途から證明しようと試みる。我々は經驗の諸現象をその最も簡単な・非經驗的な・要素に分解する、そして如何に其等の要素から複雑した事象が展開されるかを研究する。問題の提出と解決の困難とはカントに於けると同じである。即ち、其等の根本概念が經驗から導き出されなるとき、其等が普

遍妥當性を保證してゐるなら、そしてまた恣意的に假定することも出来ないとき其等が一定の經驗に志向してゐるなら、其等の根本概念は何處から發生するのか、と云ふことである。メンガーは經濟的根概念を人間の心理學的構造から導き出さうとする傾向があるが、そこに正常の經濟者の形而上學的構想に於ける認識批判的萌芽は終るのである。實際メンガーの方法は歸納と直覺との中間物であり、相對的に普遍妥當的な經驗についての認識を一般化せるものである。

法律哲學に於てはシュタムラーがそこからしてメンガーに於けるやうに次第にあらゆる可能な法の具體的な諸規定が導かれる當爲の根本論を興へた。ジムメル形式社會學は此の考へ方に近い。

認識批判の魅力的特徴は例へば價格、生産、所得、貨幣の如きさまざまな現象を同一の根本法則から説明する利益を興へるところの體系論 Systematik の内にある。然しその不利は經驗の變化に際して體系が陥る經驗への二律背反と云ふことにある。普遍妥當的な法則は幾何學の命題のやうに經驗によつて訂正されないから理論に即して方向を定めると云ふことが經驗にとつて大切な問題である。斯くて例へばメンガーは限界效用原理から完全に説明せら

れない獨占到社會的生産物の減少の動きを歸してゐるし、シュタムラーは強制的強力を缺く法規を法とはみないのである。法則の前以て認められた普遍妥當性と必然性とは適用された理論の段階で現存組織の觀念形態として現れる。以上に従つて認識批判的根概念は非歴史的存在であり、それは歴史的形態の中にさまざまの與件が挿入される同一の根本法則の具體化を見出すのである。だが與件自體は内在的法則によつてはたゞほんの極少の部分しか變化しない。

我々が既にメンガーに於て見出したところの個性記述的(個性敘述的)及び法則定立的(法則科學的)方法を分つリツケルトの區別は同一の根本態度のものである。個別的なものについての科學、歴史は、歴史的現象の一般概念による先立つ分類の根據に基いてのみ可能であり、歴史的事實の普遍的文化價值にかゝはらしめられる。法則性は個別的なるもの一般的ななるものへの包攝に、現象の普遍概念による分類に存する。その普遍概念は個別的なるものの法則として現れる。

(e) 理解、意味法則、マックス・ウェーバーはメンガーの方法論の誤りを明かにした。即ち限界效用法則は一つの展開された合理原則であり、云つてみれば遊戯の規則のやうな一

つの意味に充ちた目的・手段の體系である。論理的に構成されたものとしてそれはまづ以て經驗に於ける何等の適用領域を有たない。然し人間はその行爲に於て屢々同一の推論に導びかれるから、實際に觀念的な意味内容に對應する態度が現れると云ふ或る一つのチャンスが成立する。結論的に理想型的構成は、それが遊戲の規則の體系であらうと經濟をいとむこととの原理についての體系であらうと、人間の行爲を主觀的に思はれた意味に従つて理解し分類せしめる。意味法則自體は必然的な・普遍妥當的な・關係であるが、行爲の適應的な因果惹起は其等の關係によつて「多分……」の調子を帯びる。

ゾムバルトは其等の生みの父達によつて何か全く別のものと考へられてゐるにも拘らず、すべての社會法則を意味・必然的な關係と解釋する。斯くて例へば貸銀基金説の如き全體・部分の關係の大きさの法則、例へば資本主義と利得追求の關聯の如き全體・分岐の關係の本質法則、また例へば需要供給の法則の如き目的・手段・關係の法則があるのであり、そしてこれ等の普遍妥當的な・だが假設的な・關係と並んで「傾向」、繰返された經驗の根據に基く豫斷があるとする。

シュパンは社會的行爲の主觀的に思はれた意味自體が社會によつて即ちその中で個人がは

じめて精神的實在性を受けとる社會によつて制約されてゐるとみる。そこからして社會及びその部分形像の分岐及び再分岐の法則が歸結され、そこに個人によつて思はれた行爲の意味は向けられてゐると考へる。

歴史の經過は理解的方法によつて行爲の適應的因果惹起の連鎖である。意味内容は行爲の可能性を叙述し、事象の中に傾向として反映する。そこから歴史哲學は新しい衝動を受けとる、即ちトレルチは生の諸理想の中に歴史的生活の創造的規制要素をみた。歴史に於ては理念の內面的論理の法則が支配する(T・レッシング)。シュプランガーによれば歴史的發展は文化諸體系の目的論的構造を示す。フィアカントは文化諸現象の文化變遷に於ける恒常性を基礎づけるところの或る時代の全體意識との聯關を示し、ブライシツヒは發展の振子運動、歴史のさまざまの時期の平行を確立した。

シュペングラーは文化發展の一義的規定を諸の文化圏の生活に限定した、即ち此の文化圏の内部の發展は青年、壯年、老年の諸段階を經過し、一定の地域に生長せる精神生活のすべての發展の可能性が盡きた後に文明の裡に死滅すると云ふのである。歴史法則の此の限定によつて歴史の意味としての人格發展乃至社會的進歩についての原始的な諸理論は清算せられ

た。

(f) 社會的本質法則、次の二つの方向は現象學的根本態度に結びつくものであり、社會的なるもの本質形態と本質結合とを叙述することを試みる。

その第一は形式社會學で、これは相互的作用或は社會化の一般的形式を研究する。支配從屬、競争、模倣、分業、代表、政黨構成は社會的なるものの根本形成である。これ等の根本形象及び根本過程の具體的な現象は國家學、法律學、經濟學の對象である(ジムメル、フィアカント、ウィーゼ)。社會的なるもの本質形態は社會的及び歴史的事象の諸の可能性を限定する。此の方向の方法は對象分析であり、例へば政黨の本質から、不斷に反覆される根本形式と根本作用とが生じ(ミヘルス)、其等は政黨構成の具體的な諸の可能性を限定するとする。形式社會學は従つて形象及び關係の反覆する同種の形式を對象とするのであり、それは具體的な社會的現象の諸の形成可能性を探究する。

第二は文化社會學であつて、それは第一のものとは異り、具體的な諸の文化單位の發展可能性を研究する。それは文化諸要因の秩序と繼起との法則をたてることを目指す(マックス・シェーラー、アルフレッド・ウエーバー)のであつて、例へば文化の諸段階の經過に於

ける精神的なるものと實在的の下部構造との關係、文化發展に於ける進歩の可能性等を探究する。斯かる聯關をマックス・シェーラーは例へば次の如きものの裡にみた、即ち中世の學問的生活共同體とドグマ的思惟との間に、三種の進歩、即ち舊い文化に對する鬭争に於ける進歩、舊い文化要素の繼承による進歩、技術的知識の堆積の進歩、これ等の進歩の法則に、また、それが見出す利害と衝動とが強ければ強い程、諸の觀念はその眞理内容を抽象して愈々それだけ歴史的に重要なものとなると云ふ事實に。ヤスベルスの世界觀の心理學、マンハイムの知識社會學は同様な關係を明かにする。

斯の種の本質法則は「多分」と云ふ調子を帶び、それは諸概念ではなく諸對象の關係を包含する。然しそれはその具體的形成によつては、はたなく單にその可能性によつてである。それ故斯の種の本質法則はそれ自身を諸概念間の論理的必然の關聯からとひとしく具體的現象の繼起の因果關係から區別する。

(三) 社會の構成法則及び發展法則 此の問題の學說史に一瞥を投ずれば次の如き原理的なものが存在する。

我々が社會法則について語るとき我々は最も一般的な意味に於て社會事象の何等か一義的

な決定を、社會的・可能的なものが諸の可能性の無限の充溢さから一定の定量クォンティタティブによつて限定されることを考へてゐる。事象の眞實なる決定、「世界を最も内奥に於て總括する」ものは人間の思惟に直接近づきえない。我々は事象の眞實決定性を四つの範疇で思惟的に摸造しようとする。第一、可能的なるものを矛盾なく思惟しうるものによつて限定することによつて。例へば分配された収益ユートレイグの總計は生産の全収益を越すことはできない。個別的なものをそのとき個別的なるものの定量として現れる一般概念に關係せしめることも亦これに屬する。第二、可能的なるものを目的手段關係によつて限定することによつて。収益性の原則を追求することによつて生産手段の價格は生産物の價格によつてきめられる。第三、可能的なるものを諸對象の適合性フュエルトリックリツヒカイトによつて限定することによつて。我々は例へば徳のある樹木、價值を聞くと云ふやうな陳述を無意味であるとする。本質は具體的・可能的なるものの働く場所を限定する。それはあたかも一般概念が個別的なものをその本質的な特徴に於て規定するが如くである。第四、諸現象の規則的な繼起の確定によつて、——それは規則の装ひをなし事象の因果的決定への接近を意味する。例へば失業は犯罪の増加をもたらず。これ等四つの形式——ドリツシュはこれ等を「整序原則」と稱した——に於て經驗の決定は思惟の對象となる。

これ等の種類に對應して社會法則も亦原則的に思惟法則、意味法則、本質法則、因果法則に分れる。然しそれでもそれが如何なる性質を有つてゐるにもせよその眞實の規定は上述の何れの形式に於ても考へることが出来ないと言ふ意味で偶然に屬するところの諸現象の残りが残存する。我々は例へば實在要因によつて與へられた多くの可能性の間の「……かどうか」「……かさうでないかどうか」と云ふことに對する個人的決定の情況を發見する。

以上のことから必ずしもすべての社會科學的認識が法則認識ではないこと、さらに或一つの認識範圍内の法則自體が統一的構造のものでないこと、最後に思惟法則と因果法則との間の聯關は一つのものゝ絶對的優越乃至兩者の完全な一致の聯關ではなく、社會事象の客觀的可能性と適應的因果惹起の間の複雑した基礎構成的聯關ファンデメンタル・インテグレーション・リレーションであること、これである。これ等三つの契機は、社會科學的方法論から屢々視野の外に逸せられてゐる。

歴史法則は社會法則と同じ諸前提に従ふ。社會は簡單なものから複雑なものへ、原始生産から職業の分割へと進歩すると云ふ命題の如く、發展の思惟法則が存在する。また資本主義の内在的「原因」からの展開に關する諸理論のやうな發展の意味法則が存在する。また辯證法的乃至累積的進歩の法則のやうな發展の本質法則が存在する、そしてまた經濟諸段階の理

論のやうな系列の經驗的規則が存在する。

思惟は事象の規定根據を次の如き、直接に見る、聞く、感ずるの活動によつて近づくことのできない・眞實決定性を述べる・諸形式のもとに認識しようとして試みる。その形式は次の如くである。

(a) 體系論理及び發展論理(展開法則)の法則、その相互の關係についてあたまたかから普遍妥當的陳述がなされるところの補完的概念が存在する。三角形は百八十度の角の和をもつ、全體は部分よりも大きい、簡單なもの(元素)は複雑なもの(化合物)に先行する。すべてこれ等の陳述は基本概念(三角形、全體、簡單なもの)の裡に暗黙裡に含まれてをり、論理的概念展開の規則によりそれから導き出される。其等はすべての個別諸科學に於てより具體的な概念に關係せしめられる。

展開法則はすべての數學的命題、同一性の諸關係——全體・部分・關係である。社會諸科學に於ては展開法則はありとあらゆるさまさまな内容をもつのであつて、それはその具體性の結果それが導き出される三段論法を曖昧ならしめ、獨立的に考へるべき因果系列の結合を取扱ふと云ふ意見に動機を與へる。國民經濟學に於ける展開法則は種々なる歸屬理論であつ

て、それは生産要因の生産の結果にあづかる頒け前をば分配された總計が全體の成果に等しいと云つたやうに決定する。また價格は商品量が同じで貨幣循環が増大した場合に騰貴すると云ふ數量説の貨幣價值法則がさうである。また需要が生産の規模を決定すると云ふ優越の法則 *Vorranggesetze* がさうである。それ以上の展開法則は、職業分化増大の法則、社會的均衡の種々の法則、人間は食糧の餘裕をこえて増加することは出来ないと云ふ人口法則、支配國家と階級構成は結びついてゐると云ふ命題、の如きがそれである。斯の種の法則には論理的必然性と普遍妥當性とが歸せられる。だがそれ等は何等經驗的適用領域を有たない。ユークリッド幾何學が非ユークリッド幾何學と並存するやうに、剩餘價值學説は限界效用説と、否、「轉倒された剩餘價值説」(トライチケ、シュバン)と相並んで存立しうる、蓋し各體系は受容された・非經驗的・基本概念の矛盾なき展開の裡に盡されるからである。これ等の法則は事象に於ける諸現象の如何なる聯關についても述べず、たゞ思惟に於ける諸概念の聯關について述べる。上述の諸陳述は「自明なこと」「同義反覆事」を表現する(デュルケーム)。若しあたかも社會諸科學に於て諸利害集團の要求が屢々「自明なこと」を無視して仕舞つてわたなら、其等の陳述の主張は分類上の價值以上に出て根を下すことはなかつたであらう

概念の三段論法は社會學の構成法則にも發展法則にもひとしくあてはまる。従つて分配量の總計は全體の収益より大きくないと云つたやうなアプリアリの陳述と相並んで、經濟的活動は原始生産から獨立の産業にまで進むと云つたやうな陳述も亦可能である。展開法則は體系法則がさうなやうに發展法則たりうる。剩餘價值説の體系は發展の論理を含み、資本主義の發展についてのより新しい諸理論は屢々展開法則に依存し、ヘーゲルの歴史に於ける諸觀念の辯證法は同様な概念論理學に基いてゐる。

個別的なるもの一般概念による分類は結局概念論理學の法則のもとに屬する。古い理論によればこれは具體的な諸對象の共通な特徴の抽象によつて成立する。諸現象の充溢はこの思惟過程によつて整序される。經驗の整序原理として一般概念は直ちに同種の性質と關係との反覆の法則を述べる(リッケルト)。例へばすべての人間は死ぬ、それ故にカトーは死ぬ、と云ふ推論が法則として解せられる。一般的なものについての科學の裡に法則定立的觀察法は必然的に基礎づけられてゐる。

近代の論理學は——スコラ學の普遍説に結びついて——抽象的一般概念の理論の困難を示

した、即ち諸の對象の共通の特徴をとりだすことは既に「特徴」の豫め認められた一般概念を前提する、さらにそれにも拘らず一般的なるものを適切に再現しない共通の特徴が存在する。例へば樹木と云ふ概念は「緑」といふ特徴によつて適切には定義されない。そのことから一般的なるものは個別的なるものに比して第一次的なるものである、一般概念は特殊なるものをはじめて概念的に整序するのではなく、個別的なるもの、現實にあるもの (So-Sein) を諸の可能性の限定せられた範圍に制限するところのそれ自體具體的な本質體であると云ふことが生じる。すべての存在する樹木の種類の歸納によつて我々は樹木の概念をうるのではなく、此の概念が我々に種々な對象を樹木として認識せしめるのである。

一般概念が經驗の諸對象にかゝる限り、第二の見解と意見を同じうすべきである。本質的なるものから偶然的なるものを推論することからえられた陳述は本質法則であり、それは具體的存在の客觀的存在を示すものである。

然し乍ら一般概念が數學の根本概念のやうに適用領域をもたぬ公理を示す限り、公理の展開からかちえられた命題に對しては三段論法の法則について云はれたことがあてはまる。蓋しこれ等の場合に於ては概念構成は經驗對象への何等かの關係に結びつけずに任意的である

からである。

(b) 意味論理學と規範論理學の法則。我々はその決定を思惟的に把握しうるために社會的行爲をあたかも遊戯の規則の如く一定の意味内容を示すところの概念及び規則の一つの考へぬかれた體系にかゝはらしめる。斯くて構成された目的・手段・體系は行爲を誤れるものとしてまた「正しきもの」として判断せしめる。

社會科學の體系は一系列の斯かる意味複合體を含む。例へば國家契約の構想とそれから導き出された國家及び市民の權利、無上命令とそれから歸結される道德の諸原理、限界效用説の價值構想とそれから出て來る經濟的に正しい態度は、人間の行爲を後から解釋して意味に充ちたるものとして理解せしめる意味内容をもつ。諸體系の妥當は展開法則の妥當の如くその内面的無矛盾性に存する。適用領域に於けるその經驗的妥當は問題をもつてはあるが排除されはしない。つねに問題は因果法則乃至心理的法則ではない。

意味法則は體系論理學の法則とは異り經驗への關係を認める。具體的な將棋遊びに際して遊戯者が將棋遊びの規則によつて態度をとるチャンスが成立するやうに、社會的意味法則も亦人間の行爲を一部分動機によつて決定するチャンスをもつてゐる。蓋し人間はその行爲を

一部分合目的性の考慮によつて一定の目標に向けるからである。目標を知るなら我々はまた一定の行爲を推定することができる。このチャンスは心理的因果惹起(動機決定)の蓋然性をこえないで例外を認める、それ故に意味法則は行爲の決定への接近を與へることができる或は行爲の「傾向」を叙述するにとゞまる。それは人間の行爲は合理的な目的・手段・圖式によつて方向がきめられると云ふ期待によつて緩和せられて、「恐らく」と云ふ調子を帯びる。斯の種の法則は社會科學に於ては、グレシャムの法則、銀行券還流のフライトンの法則、アーヴィング・フィッシャーの貨幣價値の方程式、限界效用學派の價値法則、社會契約の理論等である。

マックス・ウェーバーは意味法則を行爲の動機決定によつて適用領域を受けとり因果的に適應となるところの人間態度の理念型であるとする。例へば經濟的行爲を因果惹起せしめる限界效用法則のチャンスは、そのときどきに、どれ程著しく此の目的・手段・體系に集團の利害が結びついてゐるか、またどれ程まで經濟の實在要因の内に、此の場合大なる・競争の組織をもつた・市場の存在の中に斯かる態度の客觀的可能性が與へられてゐるか、と云ふことに依存する。此の意味に於て最大のチャンスを十九世紀の比較的自由な經濟が提供した、

然るに拘束された經濟は部分的に「減退した利得の努力」「市場が生産に對し規制せられること」の如き異なる諸前提を示してゐる。だが確かに限界效用學說の建設者達は價值法則をそれによつて經濟的行爲が因果的に規定されるところの經驗法則として考へてゐた。此の方法的な誤りから此の理論の變化した經驗に對する矛盾が発生する。また立ち入つて云へば適用領域を缺く斯かる「因果法則」のイデオロギー的事態が発生する、それは例へば次の如き典型的な議論の中に現れる、「強制して獲得せられた賃銀上昇は理論的には不可能である、それ故非經濟性を惹起しないために、さうした事態は避けられねばならない」(ボエム・パウエル)と。國家契約を實在の事實として考へた契約理論も同様な状態にある。

(c) 本質法則、適合可能性の法則、こゝでは事象或は形成の客觀的可能性の確定が問題なのであつて、従つて思惟に於ける諸概念の矛盾なき結合の可能性が取扱はれるのでもなく、また具體的な諸事實の間の因果的聯關の報告が取扱はれるのでもない、歴史に於けるまた社會の體制ジステムに於けるその本質上可能なるもの選擇が問題とされるのである。客觀的可能性の理論はクリースにまで溯るのであつて、それは次の問題に結びつく、例へばウィルソンが世界大戰への合衆國の介入に對し反對したなら歴史は如何なる經過をとつたらうかと。個々の

歴史的狀況に於て實在諸要因は行爲の可能性の間の限定された選擇を許容する。マックス・ウェーバーは客觀的可能性の中に單に諸の部分原因を孤立せしめる一つの方法のみをみる。我々はさうした思惟的な偏差ツアラフチオンから未知の諸要因の結果を推論しうるために事象の一列の既知の件を可能性の形式の中に包むと云ふのである。これに反しシェーラーによれば客觀的可能性は具體的形成の本質體が事實上開かしめるところの活動の餘地である。實在諸要因即ち經濟的及び地理的諸條件によつて狭く限られた軌道が指摘せられるが、その軌道の内部に於て觀念諸要因は實際上の歴史經過のより狭い選擇に當面するのである。精神的文化の發展の裡に實在諸要因は障壁として現れる。即ち觀念諸要因の可能性から生成したのでないものを實在諸要因の状態が説明するのであつて、例へばラファエルの繪畫は繪畫の技術の知識なくしては成立しなかつたであらう。

文化社會學は此の意味で社會形象の發展を研究する。斯くして見出された基礎づけの法則は、例へば或る民族の青年期に於ける人種要素の支配またその上昇の頂點に於ける國家の優越、衰退期に於ける生活の經濟化に關する陳述の如きがそれである。生活形態と知識形態との聯關の確定は即ち拘束された生活形態は根本的に傳統的知識の基礎をもつドグマティック

な思惟を、換言すれば形而上學的^{オントロギッシュ}根本態度を條件づけ、これに反し比較的自衛な生活形態は認識可能性に對する懷疑から出發せる思惟を、換言すれば主觀主義的^{サブジクティヴ}根本態度を條件づける。ヤスベルスは世界觀と生活形態とを相似た仕方^{アナロジー}で明かにした。我々は歴史の全體の經過をさうした法則に把握することはできないにせよ、文化發展の個々の形態にとつては本質的に限定された可能性が生ずる。

社會及びその部分形象の靜態的觀察に對しては具體的關係の可能性を本質的に限定する適合性の法則が妥當する。「法」と云ふ對象に對してライナツハとフツサーは若干の基礎づけの法則を示した。例へば私法上の約束はその本質上、實定法による確定なしに、實定法がこれ等の規定を事實上含むか否かに拘りなく、請求權と責任、絶對的及び相對的責任、多數の受信人と發信人、諸の條件の添附、代理を許容する。解釋のためには斯かる基礎づけの法則は非常に重要である。經濟科學に於てはゴットル、レヴィー、バツク等が經濟的制度的のアプサオリの可能性を明確にするために努力してをり、社會學に於ては社會化の本質形態に關する學說や社會的^{ソシヤル}根本形象についての學說が形成法則の確立に對して努力してゐる（フィアカント、ウィーゼ）。本質形態の法則は具體的一般概念の理論に依存する。特殊なるものはそ

のゾ・ザインの可能性の中に對象の本質によつて限定される。例へば家の本質はその任みうると云ふことの中に與へられるのであつて、その故に石や建築材料の堆積は家の構成部分であるにしても未だ何等家を示すものではない。これに反しゾ・ザインの形成、家の色彩、高さは本質によつては決定されない。同様に國家の本質は各々の個別國家に法秩序を要求し、それはまた服従せる主體を要求する。これ等のものが特殊的に如何につくられるかはそのことによつて立ち入つては規定せられず、具體的なゾ・ザインの形成要求に委せられる。

斯の種の本質法則は思惟を誤り導き利害團體のイデオロギーとして濫用する危険を含む。屢々「本質的に限定された可能性」の覆ひのもとに經濟の豫め把握された本質概念から競争經濟と云つたやうに唯一の具體的な經濟の形成が採擇され、その一方他の諸形態は經濟の本質と兩立せざるものとして却下される。斯くてメンガーは競争を以て高度の文化段階の發展せる經濟形態にとつて獨占到對立するものと考へ、ミーゼスは獨占到構成部分を永久的に經濟の「本質」から不可能のものであるとする。そのイデオロギー的内容をケルゼンが指摘した本質的な國家の要素についての學說も同様である。その特殊な支配關係及び權利制度をもつある一定の時期に於ける國家或は經濟の具體的な形成は屢々經濟或は國家の普遍的本質と

考へられ、それから現状維持が促される、或ひは國家乃至經濟の未來像が平和的乃至革命的發展裡にそこに到達すべく努力せらるべきものと稱せられるのである。

(d) 時間繼起の結合、或る種の現象に於ては人間の思惟は其等の現象の時間に於ける規則的な繼起の確定として何等嚴密な決定性の把握に到達しない。斯かる結合はまづ以て單にそこに現象が現れる最も頻繁な「環境」を告知するにとゞまり、それによつて其等を説明することなくたゞその現象を眞に決定するもの存在を暗示するに過ぎない。諸現象の繼起の規則は蓋然性の程度に應じて例外の頻繁さに階梯ある「多分」と云ふ調子を帯びてゐる。社會科學に於ける斯の種の法則は、例へば種々な所得層の家計支出の割合のエンゲル・シユワープの法則、そのときどきの食糧の餘地を充填する人口運動の傾向が存在する(マルサス)と云ふ形態の人口法則(それが食糧の餘地を越えることができないと云ふ意味ではない)、諸國家の發展に於ける一系列の國家形態の設定(アリストテレス、ポリビウス、トマス・フオン・アクイナス、ヘーゲル、ロツシャール等)、前進する經濟集中の法則、經濟形態の段階に關する説(ビュッヒャー、シュモラー)、工業組織と階級形成との聯關の主張、その他がそれである。斯かる法則の妥當は經驗による確證に結びつけられてゐる。時間繼起の結合は本質に於て物理

的法則の構造を示す。其等が而も社會科學に於て物理學に於けると同じ蓋然性の程度をもたらしめないのは社會的經驗は物理學に於けると同じやうな恒常性を示さないと云ふことにその根據がある。社會事象の規則の蓋然性の程度は狭い經驗領域への限定によつて(ミル)、或ひは偶然の計算そのものを蓋然性計算によることによつて(クルノー)、高めることができる。(e) 現象を眞に決定するものの思惟的模寫のこれ等の形態と共に、人間の思惟は或る種の事實に對してはその一回的な・偶然的な・事實性の確定を以て足れりとしなければならぬ。その決定は上述の形態の何れのものに於ても與へられない。政治史に於ける或る種の一回性、それが時間繼起の裡に用ひられえない限り、經濟學に於ける景氣變動がこれに屬する。また、經濟的發展にとつて特殊の意義あるものとなつた技術の發明の如きそれである。さらに世界史並びに文化史を豊かならしめた特殊の才幹の出現も亦さうである。これ等の現象は實際に於ては一義的に規定しうるにしても、我々の思惟はその規定原因を些しも近似的に與へることが出来ない。だが斯かる認識の學問的價值はそれによつて尠しも減するものではない。蓋し法則に於ける認識は決して高き價值を基礎づけるものではないからである。

事象に入り込む偶然の領域に於ては我々の思惟は諸の規定、聯關、齊一性の若干の里標を

認識するのであり、其等を以て狭く限定された思惟は存在の無限性を征服しようとする試みるのである。だが同時に我々は斯かる「法則」の認識価値を過重評價し、其等を志向的に利用し、その限定された經驗的妥當への要求によつて代置しようとする傾向がある。あたかも社會科學に於ては想像的に精確な認識の要請への轉換、また反對に諸の要請の表面上精確な認識への假裝が存在し易い、蓋し社會科學的思惟は自然科學のそれに比し較べものにならず生活利害に結びつけられてゐるからである。

我々はドブレツツベルガーを十分な意味でとりあげるためには彼の別著（『Die Gesetzmässigkeit in der Wirtschaft』 1927）をも考慮に入れなければならないが、彼に於ては價值の法則、貨幣の法則、剩餘價值の法則・利潤の法則、利子の法則、地代の法則、勞賃の法則、其等が資本の法則に具體化されて統一されると云つたやうな學問の體系についての觀念が、一つの科學についても、また統一された科學體系についてもなく、ために個々の法則と稱せられるものが、あちこちからばらばらに集められて來てゐる。従つて收穫漸減の法則、グレシャムの法則と云つたやうなものが嚴密な社會科學の法則として持ち込まれると云つた結果を呈してゐる。因果法則、本質法則、思惟法則、意味法則、と云はれるところのものは或はカント

から或はM・ウェーバーから或は現象學からもたらされたもので、我々はそれをもつと具體的に或は近代自然科學の方法論として、或は謂はゆる個別的因果を云々する歴史科學の方法論として、或は靜觀的立場の意識の自己制約の學として、その意味をイデオロギ的に明確に曝露しなければならぬ。斯くて我々は法則なる概念は人間が世界過程の統一と聯關、相互依存性と全體とを認識する段階の一つであることを忘れてはならない。また法則と云ふ言葉のその起源から云つて我々は合法則性とは目的に適つた合法則性と考へ易い、法則は現象そのものに必然的に内屬し、現象の研究者によつて現象の中に發見される秩序の表現であるに過ぎないことを銘記しなければならない。

さて法則性は客觀的な現實との關係に於て如何なる諸契機をもつか。「客觀的實在の過程は、その最も抽象的な自己規定として質をもつてゐる。この質はしかし自らに外的關係を含んでゐて、自己疎外的規定としての量と結びついてくる。即ち同質性の基礎の上に、抽象的に云へば自己の外に自己の規定をもつ所の量があらはれる。……この質から量への移行は質の基礎の上で量的側面の顯現として理解される。所が量は其の本質上蓄積的過程であつて、この過程に於て實は質と量との矛盾の蓄積がとげられる。この蓄積が前の質的基礎に固有な

一定の限界に達すると、この量的過程はその質的基礎と共に、飛躍的に他の質に移行する。之が量から質への移行である。だから質から量への移行は、質的基礎に於ける量の顯現として、蓄積的過程の展開を意味するが、量から質への移行は一の飛躍的轉化を意味するのであつて、この兩者は、實在的には區別され、性質的にも異なる所の二つの移行過程である。「質と量との相互移行は發展の側面を示しそのまま、對立物の相互滲透に含まれるものではないが、後者は前者を離れて理解できない。「第一には其は現實の更に多様な矛盾對立の諸側面の一つとして量と質との對立を含む意味に於て。第二にはこの多様な諸對立のどれをとつてみても、その各々の對立が又種々の質を持つてゐる意味に於て。例として現實性と可能性との對立……この……對立は第一の意味に於ては相互に移行する。しかし第二の意味に於ては更に具體的にその關係が規定される。即ち現實性は單なる現實性一般である事はできない。それは一定の現實性、ある質をもつた現實性でしかない。しかしかかる現實性は永遠に固定したものではなく、自己外化してそれ自らの中に外的關係を含んでゐる。即ち客觀的存在の現實はその中に無限の可能を含んでゐる。この多數の可能性及びその諸條件こそ現實性の自己外化に他ならない。そしてまたかかる可能性及びその各々の諸條件の多數なる事によつて現實

性は其の運動に於て見られてくる。しかしこの可能性の蓄積は、一定の質の現實性の基礎に於て行はれた故に、それは固有の一つの限界につきあたる。かくて飛躍的過程が起り、ある質の現實性は他の質の現實性に轉化する、等々。かかる種の質をもつた現實性の連關は、ある個別科學の内部でも多くみられると共に、又一つの個別科學の領域に於ける現實性から、他の個別科學の領域に於ける現實性への轉化をも與へる……例へば物理學的現實から化學的現實へ、自然科學的現實から社會科學的現實へ、等々。」（吉田敏氏の「因果性と法則性」なる論文に據る）

さて現實性と可能性との前者の基礎に於ける統一が即ち必然性に外ならない。可能的なるものの現實化こそ必然的なるものである。「可能性の諸條件が物質的實在の積極性によつて整へられるならば既に現實性に移行して居るのであるが、もしその諸條件の一つが缺けるならば、その可能性の根據も遂に現實化せず終る。ここにこの諸條件の現實化への偶然性、或は諸々の可能性の現實化の偶然性があらはれる。」「一定の質の必然性、それは又自らに外的關係を含むものとして偶然性である。この一般的必然性と個別偶然性との統一は必然性の基礎に於て行はれる。従つてある質の必然性から他の質の必然性への轉化の偶然性を通して、

偶然性の蓄積によつて行はれる。」偶然性は必然性と區別される客觀的範疇で因果性と對立されるのではないが、二個又はそれ以上の原因の連鎖が互に交錯して作用する場合、我々が唯一つの原因しか知らぬときは、その際發生する現象は合法則的であるに拘らず偶然的と考へられる、と云はれるなら、それは機械的必然性を説き偶然性を主觀的範疇にするものである。また、何故私は我々の邂逅を偶然と云ふか、私は私の知人を動かした原因を知らなかつたからである、と云はれる。然し知人との邂逅は一般には寧ろ必然である。唯この特定の知人との邂逅が偶然なのである。それは原因を知らないからではなく、邂逅する爲めの諸條件がこの特定の友人に於て偶然に實現されたと云ふだけである。また或は偶然とは事物の必然的本性から生じない純粹な外的條件によつて制約されるものであると云はれる。然し必然性自體が自己を偶然的なものとして規定するのであつて、必然は偶然に於て現れ、偶然は必然の基礎に成り立つことを忘れてはならない。無限の特殊的偶然性を通して一般的必然性は貫くのであり、かゝる必然と偶然との統一としての現實的過程性が因果的法則性である。それは必然性のもつ抽象性が特殊的偶然性に於て充實されたもので、因果性と必然性とは同じものではない。前者はより具體的である。ところで物理學の最近の傾向から因果性が減じて蓋

然性が之に代つたと屢々云はれる。然し因果性は必然と偶然との統一として又根據と諸條件との統一である。かつて此の諸條件の外的集結に於て必然性に偶然性を與へた事態が今やこの因果的連關の諸條件に於て統計性乃至蓋然性を與へる。従つて統計的方法是偶然の事件の合法則性の研究に携はるものといへる。要するに因果的法則性は普遍的な實在の連關を與へる。しかし其は蓋然的法則性によつて自己を實證しなければならぬ。又後者は前者の基礎の上にのみ成立する。故に因果的法則性は如何に統計をとるかの方角を與へ、又實際の統計の蓄積を通してのみ新しい因果的法則性は得られてくる。しかし統計的法則性そのものが因果的法則性ではない。そこには必ず一つの質的轉換がなければならぬからである。(吉田敏氏に據る)

オツペンハイマーは法則科學としての社會學を論じて法則の問題を取り上げてゐる。彼によれば社會學は定型的・集團的・大衆活動をそれが歴史的に有意義なとき把握するのであるが、それはリツケルトの所謂普遍化的文化科學としてある。それは斯かる事象の一般的概念並びに「法則」を見出すことを意識的に意圖してゐる。こゝではリツケルトの所謂普遍化的方法との「中間領域」が取扱はれるのであつて、社會學は歴史家に對してその勞を省く極

めて有用な、否必要な仕事をするのである。然し社會學の要求はさらに大である。それは人格的・個性的なものを超社會的であるが故に法則に閉ぢこめることを斷念しなければならぬが、個性記述的歴史學は而も社會學の準備仕事を缺いてはその目的を達することは出来ないのである。一般的なものについて完全に精確な觀念を有たないなら、比較と原因結果の結びつきによつてどれ程まで觀察された事象が一般的原因によつて規定されてゐるかを知らないなら、ひとは人格的なもの個性的なものをその唯一性に於て全く評價する術を知らないのである。その範囲内で人格乃至個性が運動の自由をもつ範圍を普遍的把握が規定しない前には人格と集團及び特殊の性格をもつ集團と他の性格の集團との關係と云ふ個性記述的歴史學の中心問題は一般的に科學的に設定されないのである。それを何と名づけようと歴史學は此の補助科學を缺いては一義的に規定された科學となることはできないのである。斯くて歴史科學は社會學なる普遍科學の主要部分を構成すると共に社會學に原理科學として依存し、そこから諸條件、根本概念、諸前提をかりて來るのである。

さて多くのものは事象が自然法則によつて完全に規定されてゐると考へてゐるが、オッペンハイマーによればそれは謬見である。すべての事象が自然法則のもとにあると云ふ命題は、

すべての事象の必然的條件はその自然法則性であることを云ふのみで、自然法則性はその充足的條件であるとは説かない。自然法則は或る状態の繼起アッフォオルゲを先行する状態から規定するが、如何なる自然法則も先行する状態及び従つてまた續く状態が如何なる性質のものかについて何か直接我々に語ることがないと云ふことは即ち事態を物語るものである。或る状態の事實的存在についてはたゞ觀察が我々に物語るのみ。事象が自然法則によつて充足的に規定されると云ふ觀念は物理學的に無意味である。物理學的法則はつねに假設的命題で、特定の條件に特定の結果を結びつけるのである。即ちそれは一般に何が生起するかを述べることなく、たゞAなる事象が起るならそのときには必然的にBなる事象が起るとのみ述べるのである。自然法則の形式に屬する必然性は一事象の他の事象へ關係にかゝはるのであり、事象そのものにはかゝはらない。従つて事象Aが起る乃至Bが起ることを我々が見出すなら、それは我々の自然法則の認識に對比して全く一つの新しい認識なのである。我々がすべての自然法則を認識しえても、一般に一つの事象が存在すると云ふ一命題は我々に論理的に橋渡しできぬ裂目によつて自然法則の認識から切離されてゐる何か全く新しいものを物語るであらう。科學がその完成の極致に達したと考へても此の裂目は充されな残るであらう。物理學の全

微分方程式を完全に正確に知つても全空間及び全時間に於ける唯一の物質的組織の状態をも其れから規定することはできず、その状態を不明な全く偶然的な事實として受取らねばならないのでらう。何等か或る過程の説明の可能なるためには既に何等かの發端の條件が與へられてゐなくてはならない。斯かる・自然法則について云へば偶然的な・發端の條件を前提とすることなく自然事象を説明しようとすることは矛盾したことである。自然の中にはそこから系列の他の状態が必然的なものとして導き出されるやうな特徴的な發端の状態と云ふものは存在しない。斯くて物理学は事象の自然法則性を必然的に前提しなければならぬが自然事象の偶然性を排除する結論を決して主張することはできないことが明瞭に示される。オツペンハイマーは斯くレオナルド・ネルソンによつて説くと共に、此の誤謬の廣く且つ深きことの故にさらにクルノーの説を援用してゐる。即ち、偶然が人間行爲のあらゆる計算性を不可能ならしめると云ふ法則定立的社會學に對する反對論のためにクルノーは偶然の概念を検討し、偶然なるものは偏に我々の世界の不十分な認識によるものであると云ふ一般の考へ方に反對した。クルノーによれば全知全能者はそれを豫見しえやうが彼にとつても偶然はその本來の働きを保持してゐるのであり、豫見せられた衝突はそれにも拘らず偶然的な衝

突であると云ふのである。偶然は二つの事象の鎖が切斷された場合に存在する、それは協同的ならぬ原因の二系列の衝突以外のものではない。此の見解は組織的原因 *konstitutionelle Ursache* とそれに加はるところの偶然的原因 *akzidentelle Ursache* とを區別せしめる。従つて偶然は原因なき事實と云つたやうなものではなく、諸多の原因の衝突を前提とする。然しひとは偶然は法則なき事實であると云ふことができる。蓋し如何なる法則も諸多の原因の此の衝突を説明しないからである。それは「純粹な事實」、「與件」である。然る限りクルノーは偶然の歴史に於ける役割を大ならしめた歴史家に味方したものの如くであるが、偶然が支配する場合、整序する理性はなほ未だその權利を失ふものではない。彼は偶然の概念を一般化し、まさにそれよつてその有害性をそれから取り上げた。彼はひとがそれから引き出す反合理主義の歸結を制限した。我々は社會諸科學が斯の種の偶然的衝突を取扱はなければならぬからとて不可能なものとして放棄する要なきことを疑はない。蓋し自然諸科學も亦特定數の斯かる衝突を取扱はねばならないからである。自然から社會に移るとき純粹な事實乃至與件の數と意義とは増大する。偶然の役割が増大し一寸見には理性の力が及ばないかの如く思われる。然し結びつけられない諸事實は歴史ではないが、また星座表の如き動かすこ

とのできない規則から生じたやうな結びつけられた事實も歴史^{ゲシヒテ}ではない。斯くして歴史科學は演繹と説明との一種の雜種として考へられるのであり、それは「必然的な法則と偶然的な事實との或る混合」を示すのである。されば偶然^{アクチデンテ}的なものを必然^{ノイトウエンテイゲ}的なものから、また偶然的なるものを組織^{ツイフエリゲ}的なるものから區別するのが歴史的病源學の課題であるのみならず、意義なきものを重要なものから區別することがその課題である。それは如何なる場合に相會合する諸原因系列が一つの事象を招來するために眞實相互に獨立であつたか、また如何なる場合に其等は連帶的であつたか、即ちより一般的な原因の體系から起つて來たかを確定するのみならず、其等の結果の通り過ぎるところのものまた殘存するところのものをも確定しなければならぬ。そのときそれは方法論的勞作に高められ、歴史敘述者は年譜又は新聞の製作者と區別される。

ところで多くのものは「法則」なる概念は自然科學から起つたものと考へてゐるが、それは誤りである。オイレンブルクは法則なる概念が自然科學的ならざる四つの根源から出たことを示してゐる。(F. Eulenburg, Naturgesetze und soziale Gesetze. Archiv f. Sozw. u. Sozp. XXXI.) 即ち法則が「規定」^{ゲゼツツング}と同様に用ひられる「法定」^{statutarisch}的起源、宗教的起源、自然

法的起源、審美的起源、これである。宗教界に於て神は立法者として現れ、それは自然法の觀方に於ても放棄されず、コント的に云へば神學的なものから形而上學的なものに純化された。オイレンブルクはそれについて、斯くて社會科學の意味の自然法則の根源は元來歸納的及び實驗的科學から借りて來られたとする意見乃至また他の範疇を恣まに移して來たとする意見は斷乎として否定されると云ひ、尠くとも宗教的及び自然法的觀察は人間の歴史的及び社會的生活の合法的觀察の思想に極めて強い影響を及ぼしたのであつて、この觀方は何か偶然的副次的なものではなく深く人間の本質そのものに根ざしてゐると述べてゐる。

さて精密自然科學の意味の「法則」とは何であらうか。多くのものは法則は何か天體力學の「法則」の如く時空に於ける量の完全に精確に關係を示さなければならぬと考へてゐる。ベルグソンは近代科學は法則、即ち可變の大きさの間の恒常的關係を求めると云つてゐるが、素より彼は落下の法則の如き精確さをもつ定式のみが自然科學的法則であると考へるやうな誤りには陥つてゐないが、他のものもつと先見の明を缺いてゐるのであつて、彼等に對しスペンサーはこゝに科學が何であり何を寄與しうるかについての極端な見解があることを説かねばならなかつた。即ち自然科學に於てまた、品質的にのみ、従つて分量的には豫言でき

ない多くの事物があると云ふのであつて、スペンサーは氣象學を例示した。此の誤謬を冒すものは屢々各の自然科学にはその裡に數學が存在するだけそれだけ眞の科學が存在すると云ふカントの有名な命題にたよるのである。然しフェリックス・クルューゲルはその誤謬を指摘した。彼は心理學を機械的諸科學の系列に入れることに強力に反對したが、法則科學と力學とを同一視する見解に對し、右に述べた如きは當時の自然科学的潮流の中に於けるカントの言でカントが他の面を有つてゐることを力説し、それは物理的力學を體系的に記述的な自然科学の他の部門、特に生物學と比較すれば明かであるとし、カントが判断力批判で生活現象は運動機關の機構によつてのみでは説明されず、別の新しい法則的秩序によつて觀察されねばならないと説いたことを指摘する。機械的原理は他の原理に補充されて以て自然の法則の經驗的研究がなされねばならぬのである。また任意に屢々繰返されるもののみが自然法則に従ふものと認められねばならぬと云ふ見解も亦右と同様に謬つてゐる。法則はAが起つたときBが起ると云ふ形式の假設的判断であるが、それは幾度びAが起るかまた一般にAが起るか否かについては何事も述べるものではない。Aがたゞ一度現れるなら、そのとき法則の根據に基づいてBも亦たゞ一度起ると云ふのである。(此の議論によつてリツケルトの自然

科學と歴史との「形式的」區別についての反對がなされる。歴史は一回的なものを對象とする。然し一回性の對立物は反覆性乃至グライヒフォルムツヒカイト齊一性であつて法則性ではない。一回的なものは法則に支配されうるのである。

運動學 Phoronomie od. Kinematik の法則さへ、オイレンブルクの云ふ如く偏に應用數學が取扱はれることの故に任意に屢々繰返される現象にかゝはる。此の「第一次の法則」さへも偏に「普遍妥當的」である、即ち假設的條件が存立すると云ふ前提のもとに絶對的に妥當する。然しそれは例外なしに確證されるものではない。現實はつねに法則への近似を意味する。ひとは現實はつねにたゞ「傾向」を表すと云ふやうにそれを表現した。現實は何等純粹な法則を知らないのである。然し、物理學に於ける如く完全な抽象と孤立化とが行はれない場合、比較の方法によりまた區別乃至結合の方法により思惟的に共同の條件をつくりだすことがたゞ間接的にのみ可能となる。大部分生物學はさうした手續きをとる。地質學、氣象學、また海洋學及び組織的植物學、人類學等も亦さうである。こゝに見出された「機能聯關」はその條件は容易に與へられないとはいへ嚴密な意味でまた普遍妥當的である。こゝには現存の事情の種々な複雑性に依存してたゞ程度の差があるのみ。ひとはこゝにJ・S・

ミル以來「經驗的法則」について語るものであるが、オイレンブルクは「第二次の抽象法則」乃至「構成法則」と稱することを提案する。我々にとり特に興味あるのは論理的に從來殆ど價值づけられてゐない「具體的」法則乃至我々が自然認識の廣汎な領域でそれにたよらねばならぬところの規則性である。オイレンブルクはこゝで、氣象學、地質學、醫學的及び人類學的諸學科の全領域を擧げるのであり、彼は所謂測地學上の深さの層、全く一定の數の圖式によつて秩序を保つ個々の遊星の距離についてのテイテイウスIIボーデの規則を指示する。すべての哺乳動物が七つの頸椎をもつと云ふ具體的規則も亦これに屬する。こゝでは遠のけられた機能聯關、従つてまた自然法則を示す最初の接近が取扱はれるのであつて、その法則を確定するのが目的である。されば此の規則性は屢々「統計的法則」として表現されるが、第一次及び第二次の法則とは本質的に異なるものとみられるのである。それはすぐれて組織的な現實の敘述をこととする自然科学にとつて重要である。それは就中規則性そのものを説明し、たゞ根本にある法則をその原因と解釋するのである。

本來の自然法則の妥當範圍について云ふなら、機械的法則乃至電磁氣法則——それはアプリオリな直觀形式の間の關係をのみ含むのであつて、依つてすべての自然現象の範疇に妥當

する——を例外として現象の特殊な・いつも嚴密に限界づけられた種類の内部でのみ「普遍妥當性」をもつのであり、特殊な自在法則が存在するのである。數學化されるだけ各自然科學は眞の科學となると云ふカントの命題の意味の「精確性」については上述の如くであるが、オイレンブルクも亦數學的精確性と云ふことは自然法則の概念を構成する特徴には屬しないと云つてゐる。ところで最後に自然法則は我々に何を寄與するであらうか？ 其等は其等が多くの關係で似てゐる單純概念の如く、思惟經濟的に非常に價值が高い。其等は我々を啓發的原理として援けて新しい解決に向はせる、即ち、其等は現實をたゞ不斷により一般的な法則に還元すると云ふ意味でのみ「説明」することができる。斯くてより一般的なニュートンの落下の法則はその中に把握されるケプレルの法則を「説明」するのである、而して落下及び停滯を一つの法式にもたらしめたアインシュタインの相對性理論は今やニュートンの法則を「説明」すると云ふことができる。

右に述べたことから「社會法則」の存在に對し如何なることが引き出されるであらうか。社會的なものに於ても多くの現象の間にそのやうな規則的に繰返す關係が存在してゐるであらうか。まづ歴史を暫く別にして組織的な社會科學についてみよう。アプリオリにはそれは

洞見できないものである。第一にウィンデルバント及びクルノーの意味に於ける偶然は独自の因果系列の交錯として、第二に「自由意志」はあらゆる規則性を不可能ならしめるであらう。だがアポステリオリには斯かる見透しなしには無意味であるやうな我々の全行爲は我が社會的事象の規則的経過をあたかも偶然と自由意志とはこゝで殆ど僅かの役割しか演じないかの如く計算することを示す。各豫算がそのことを示してゐる。そして驚くべきことは誤謬が現れることではなく期待が殆ど確實に充されると云ふことである。社會關係の認識はその合法的態度の認識を云ふのであつて、經濟、法律、國家財政、教育制度、世界交通、職業生活その他藝術的没頭、政治に現れるすべての活動に於ける全社會事象はそこに社會的な法則及び規則性が存すればこそ可能なのである。此の假定のもとにのみ人間は一般に活動することが出来る。而もそれらは何か單なる法の強制ではなく、あらゆる合法的關係のまづ以て見透しえぬ多種多様性であり、要するに多種多様な人間現象に於ける秩序なのである。そこは社會的な法則が存立すると云ふことが社會及びあらゆる文化のまさにアプリアリである。斯くてこの關係を探究することが社會的學問の不可避な仕事なのである。それは個人にはその行爲の基準として「與へられた」ものであり、科學には「課せられた」ものである。

社會科學にとつては社會法則を働くものとして假定することは思惟必然性そのものである。それは類似的の構想ではなく科學自己自身の必要である。自然科學も自然法則も存在しないとしても社會科學は法則をその公理として認めねばならないのであつて、「法則」の概念は本源的に人間的、社會的のものである。

各の個別科學はつねに同一の「經驗對象」から独自の「認識對象」を形成することによつて單に「部分法則」たりうる此の合法性はまづ社會生活のすべての領域に見出されるところの「具體的規則性」である。此の具體的規則性は今やあたかも自然法則の如く多くの現象の間の關係に對する抽象的表現たるに過ぎない社會的法則を意味するのであつて、ひとはそれを「因果法式」と稱するけれど、「機能聯關」と稱した方がよりよい。其れは「普遍妥當的」であるけれど、たゞ抽象の前提に於てのみ、即ち就中それがそこで見出された特殊領域に於てのみ「普遍妥當的」なのである。さらに使用概念の同一性と環境、狀況の安定との條件のもとにのみさうなのである。それを見出すことは法則によつて把握された諸過程の相對的單純なるに際してのみ可能である。これに反し社會現象の間に斯かる關係が「例外なくすべての時を通じて永久に到る處」存在すると云ふことは條件ではない。従つて社會的法則は

社會的要素現象の關聯についての一般的な假設的な判斷である。それは普遍妥當的であるけれど、たゞその條件が充されたときのみ認められる。そして此の條件は屢々歴史的に制約されてゐる。抽象を極端に行ふことが可能な場合、社會的法則を數學的に、従つて「精確に」規定することがまた可能である。そのことは論理的な短縮手續きとして、また實際的な觀念化の手續きとして大きな利益を有つてゐる。然しそれは過重評價されてはならない。蓋し數學は單に形式科學たるものであるから、その成果も亦つねに形式的にのみ精確であるに過ぎない。事物的正しさの保證は他の根源から出て来る。而してそれが單に暫定的性格のものである、即ち新しい經驗的事實によつて衝突されると云ふことはまた社會的法則にも妥當するのである。

これまでのところつねに特殊な領域をのみ支配する部分法則についてのみ取扱つて來た。社會學の課題はすべての領域に等しく妥當するやうな法則を求めることである。然し此の場合寧ろ法則と云ふより原則と云はるべきであらう。從來これについて見るべき寄與がなされてゐない。社會的法則の我々に對する功獻は自然法則のそれにひとしい。即ちそれは思惟經濟であり、それによつて經驗をはじめて可能ならしめる。それはさらに未來の經驗の力強い

啓發的原理である。豫言は當然部分法則が妥當する領域に於てのみ特定の確からしさを以て可能である。こゝにすべての社會的技術論が始まる。

さて歴史法則と云ふものが存在するであらうか。「歴史」とは、歴史科學とは何であらうか。形式的にはそれは「生成するもの及び存在するものを時間の契機について觀察する」限りいかにも統一されたものであるが、内容的には政治史の法制史・宗教史・藝術史・經濟史・言語史・哲學史との總括である。諸の歴史 *Geschichten* が存在するのみで歴史 *Geschichte* は存在しない。従つて「歴史」概念には事實上我々の思惟の總括的綜合以外の現實の統一體は對應しないのである。それ故こゝでもあたかも部分法則或は特殊法則しか云々されないものであつて、あたかも從來取扱はれた社會法則に於けるが如くなのである。歴史法則は全體として歴史的經驗から獲得され、歴史的經驗について適用され、そこで保證乃至否定される、そしてその無條件の普遍妥當性の要求にも拘らずたゞ歴史的に與へられた諸條件のもとに於てのみ「認められる」。狹義の「歴史法則」は歴史的經過を歴史的經過として把握する廣義の歴史法則から區別される。さう云つた廣義の歴史法則が存在すると云ふ觀念は歴史學と共に舊い。希臘羅馬の古代、基督教回教の中世はさうした觀念から出發してゐたし、歴史は未

來に對する現代の教師であるべきだまたありうると云ふ近代實用主義の見解は同様な原理的假定なしには全く無意味となるであらう。然しそれは當然のこと乍ら多くのことを意味せず、その觀念は謬つてゐると考へられる。ひとは反對論據として、人格の自由、偶然、歴史的事象の多義性をもたらすことができる。人格の自由も偶然も何れも因果的に制約されてゐるが、而もその働きについては計量しえないものがあると説かれる。そして歴史的事象の多義性と云ふことに關して云へば、それはかの「環境理論」^{ミルユンゲル}と云はれるものに反對するものである。此の三つの反對論據に對して、それは歴史法則が寄與しうるより遙かに多くのものを要求することから起るのであると云ふ抗辯がなさるべきである。歴史法則はつねに或る特殊領域の部分法則たるに過ぎない。問題はつねに斯かる部分法則についてなのであつて、「如何なる歴史」がそれにかゝはるかゞ問はれるのである。その場合我々は例へば經濟史、言語史、風習史と云つたやうに、自由な人格性の概念を伴ふ全體史の偉大な領域は何等かゞはりなきことを見出すのである。此の特殊史に於てはいつも「自由意志」Spontaneität と云ふことは問題とならない。こゝでは「事物の固有の論理」が、「自己法則性」が支配する。そして個人の意志決定が重大な役割を果す領域に於てさへ、その故にその成果は無規制なものでは

ない。「偶然の法則」が、「個人の意志決定に對する全く一定の餘地」が存在するのであつて、偶然とか自由な意志決定と云ふのはたゞ特定の限界内でのみ存在するのである。また環境理論に對する反對論はたゞ不十分な歸納、個々の場合の一般化に依存してゐることしか示すものではない。

實際經驗によればすべてすぐれた歴史家は自然科学者と同様に定型及び合法則性を發見するため比較するのであつて、彼等も亦その際「重要ならざるもの」を捨象する。それによつて歴史は科學として可能となるのである。ボツプ、ニーブール、ヤコブ・グリムに多くを負ふ歴史的方法是比較の原理に基礎を置いてゐる。コーゼルは「絶對王制の幾千年の變化に於ける恒常的なもの」について語る。我々はこゝで本質的に形式が取扱はれてゐるのだと云ふことができるであらうが、此の形式も亦歴史的認識の構成部分なのである。勿論一部分たるにとゞまるのであるが、此の部分を缺いては、即ち定型及び合法則性を缺いては全歴史的現實は我々にとり不定のものとなる。その際直観なき概念は空虚であること故に、個別的なるものの規定は確保される。さて右の認識は我々をより深めてゆくのであつて、若し合法則性と反覆とが歴史的經過の裡に示されるなら、そのことは歴史的基礎の性質にその原因を

有つものでなくてはならない。即ち「要素」^{エレメント}とその可能な結合の数は限定されてゐなくてはならない。そして實際そのことは示される。生物學的・人類學的契機は比較的數多くはない。我々は「あたかも」其等は歴史的時期の間不變であつたかの如く結論することを強ひられさへする。ひとしく地理學的環境の契機も數多くはない。心理學的基礎も歴史は原則として等しいと前提しなければならぬ。歴史はたゞ個人的差異の可變のみ、従つて相對的に限定された餘地内部の偏差のみ説くのであり、そのとき傳統、傳承、客觀的な諸力の集りは同一方向に働くのである。最後に一般につねに特定の定型的な本源的表象、意志衝動、歴史の中に現實に働くものとなつた特定の本源的欲望と本源的觀念を取扱ふのであつて、すべてこれ等は歴史的觀察のアプリオリである。而して要素が數に於て制限されてゐればその結合の可能性も亦さうである。その時々、數多くの「理論的」に可能な結合の中つねにたゞ僅かのもののみが條件が爾餘のものを排除することの故に「實際的に可能」となる。

右のことから歴史的合法則性の背後には實際に抽象的な法則が存立せねばならぬと云ふことが生ずる。此の云はゞ反歴史的な法則は上述の「社會的」法則であり、我々はそれをその歴史的作用に於てのみ認識できるのである。それは歴史科學の「アプリオリティテン」である。

る。社會的現實は我々に合法則的なもの、一定の秩序をもつコスモスとして現れる。それ故に此の現實の説明^{ゾルステルンク}は合法則性の全領域を迂廻することはない。それについて煩はされねばならぬことはないと考へるものは法則についての誤れる觀念を有つてゐるのである。それは決して事象の同種なることを意味しないが、そのもとに法則が作用する諸條件の變化の法則性を意味する。法則はまさに存在者の可變性を前提とするのである。斯くてすべてその概念は歴史自體にとつて^{トランスツェンデント}超驗的であり、アプリオリであり、そのことは強められた程度で此の概念の諸體系について——これを缺いては科學としての歴史は不可能である——あてはまる。社會的法則は此の組織的聯關を規定する。此の一般性“*Allgemeinheit*”を通じてはじめて歴史學はそれが興味をもつ個別的なものを一般に認識しうるのである。而して歴史學はまた他の理由からその一般性を捨象することができない。殆どすべての「一般的なもの」はそれ自體一つの生成せるもので、それは社會的法則の働きのもとに變化するのであり、歴史家はその社會的法則に不斷に立ち歸らねばならないのである。歴史的諸科學の各部門はそれ故同一部門の理論的・組織的・科學を要求する。兩者の關係は明かである。一定の現象は社會的であると特徴づけられることの故に同時に歴史的である。また反對に、それは一たび

人間史の意味で歴史的であつたが故に一般にまた社會諸科學の對象でもあるのである。一般的なものとは特殊なるものの中以外には與へられないし、また特殊なるものは一般的なるものを缺いては把握できない。

オイレンブルクについてはこれだけとして、今や社會的法則が實際に歴史的合法則性の基礎であるならば、我々がこゝで比較的確實な基礎にあることを知るのには喜ばしいことである。此處其處で最も嚴密な意味の即ち完全な量的規定の社會的法則を導き出すことが確かに成就してゐる。重農主義者による思想體系の基礎として役立つた原始生産と(商)工業との第一次的分業は原始生産が食糧の剩餘を獲得するにつれて行はれると云ふ根本法則が想起されるが、こゝには非常に力をもつた打破することのできない聯關、依存性が存立する、それは數學的に一定の「機能」である、即ち眞の分量的に規定された法則であると云ふことができよう。斯かる法則は經濟社會について單にその靜態にあてはまるのみならずその發展に於ても即ち比較靜學と稱せられるものについてもあてはまると考へられる。普遍化的方法は歴史的現象の比較靜學についても合法則性に到達しうる。こゝに寄與さるべきものは實際に於ては進化論が有機體について設定し解決した課題に相當する。——オイペンハイマーは以上の

如く述べてゐる。(Vgl. F. Oppenheimer, System der Soziologie, Allgemeine Band. S. 177—190.)

我々は以上に於てオイペンハイマー||オイレンブルクの法則に關する見解をみた。然しそれはオイペンハイマーが、若し社會學的な、從つて歴史的に條件づけられた根本事實が「與件」として計算に與へられるなら、その純靜態に於ける全經濟學を演繹的に展開することが可能であると考へると云つてゐる (Op. cit. S. 191.) ことにみられるやうに、餘りにも新カント派的であつて、單なる量的把握を出てゐない。新明氏が「オイレンブルクは歴史法則の可能性を肯定してゐるが、彼の考へる歴史法則は極めて一般的な抽象的なものであるにすぎない。……彼は社會において絶對的に普遍的なものを以てその本質たらしめ、歴史的な普遍概念を認めようとはしないのである。……それは社會の一般的な構造を明かにするだけであつて、その歴史的な構造を無視するものである。」(『社會學の基礎問題』、一八五—一六頁)と云はれ、さらに「オイレンブルクのやうに單純に社會が個人を超越した形象であるからと云つてこれに個別化的方法の適用を拒むのには賛成出来ない……彼は社會を問題とした場合においても依然として個別化の意義を考へてみなければならぬことを没却してゐるのである。」(同上、一八〇頁)と云はれてゐるのは尤もである。オイペンハイマーがその『社會學體系』に於て

隨所に展開する法則が社會心理的法則であり、協同組合の問題にしても人間性に根據づけられてゐることは何を物語るであらうか。販賣者の心理、購買者の心理と云ふも利潤率の傾向的低下の法則に媒介されて具體性をもつのであつて、販賣者が歴史上いつも相互に敵對的・競争的であるわけではない。同様な事情は購買者についても指摘される。此の意味に於て我々はオツペンハイマー・オイレンプルクの法則論に對してもつと歴史的な法則を要求するのであり、さうしたものとしてマックス・アドラーの所論が考へられる。

所謂存在が意識を決定すると云はれるとき、マックス・アドラーはその存在が單純なる物そのものではなくて、社會的な存在であることを強調する。而して彼によればそれによつて今や一つの特種な種類の存在が特徴づけられるのであり、我々はそれについてより精細な論理的方法論的認識をもたねばならない。蓋し此の單なる自然的存在とは別種類のものである社會的存在の裡に何故に自然科学と並んで一つの特種な存在科學が存在しうるかまた存在せねばならぬかと云ふ論理的根據があるからである。即ち社會科學の存在であつて、それは自然科学と同一の存在及び因果生起の原理的基礎の上に建てられてゐるのであるが、而も独自の自然法則性をもつてゐるのである。

此の點に就いて我々は根本問題の一つに當面する、即ちそれはその不十分な認識批判的論議が近代の社會科學の仕事に非常なる混亂を惹き起したところのものであり、従つてその解明は我々の對象にとつても根本的に重要なものである。周知の如く因果科學としての社會科學の可能性は例へばルドルフ・シュタムラー或はオットマール・シュパンの如き近代の傾向によつて強く否定されてゐる。その主な根據として社會的現象はその意味が問題になるところの全く精神的な事實を含むが故に、その意味と云ふことについて全く問題とならない事物の單なる自然存在とは全く異つたものであると云ふことが主張される。すべての精神的社會的なるものはつねに何等かの目的設定乃至價值づけを含むのであり、さうした目的設定乃至價值づけによつてはじめて一般にそれは社會的事實として把握されるのである。而して此の目的關係乃至價值關係は社會的諸過程があたかもつねにそれが含むところの單なる存在及び生起の要素より何等かより以上のものを意味すると云ふやうに作用する。例へば多くの人達が木の幹を引つ張るなら、自然把握にはその際行はれる單なる運動過程が對應する。だが未だそのことによつて此の過程の本來の意義は認識されないであらう、その意義はまさに人及び木の幹の運動は一つの最初から計畫的に意欲せられたそして一定の目的に對して統一

的に規制された活動であると云ふことに存する。斯かる過程の意義は因果的社會科學の反對者の意見によれば因果概念からではなく偏に目的概念からしてのみ導かれうるのであつて、その目的概念は終局に於て人間の價值づけに還元され、その價值づけからしてのみ諸の社會的事實は理解されると云ふのである。今これ等の個々の意見に立ち入ることは必要ではない。我々の目的にとつては社會科學は因果科學としては矛盾であり規範科學としてのみ可能であると云ふその根本の立場を論定すれば足りる。この傾向の意見は純粹に自然科學的な概念及び方法を社會科學にもたらすことを精力的に拒みまたそれは十分な理由をもつてゐたので多大の同情をかちえたのであつた。然しそれはそこにとゞまらず因果的社會科學の綱領の裡に社會生活の特殊性を正しく把握すると云ふ要求に對する自然主義の勝利以外のものをみないのである。

そのことに對しては、こゝには一つの奇妙な混同に基いてゐる論理的に非常に性急な推論が行はれてゐることに注意をむける必要がある。社會的事實が意義をもつ事實であることによつて自然的事實から區別されると云ふことは確かに正しい。然しそれ故に社會的事實は最早存在の聯關ではないと云ふことを意味せず、たゞそれが價值づけの聯關たりうると云ふこ

とを意味しうるのみである。寧ろ各々の社會的事態の裡にはつねに何等かの目的が追求される或は何等かの價值づけがおかれると云ふ事情はそれ自身また存在の事實なのである。價值の觀點に於ける觀察が因果の觀點に於ける觀察とは何か原理的に異つたものであると云ふことは疑ひない。だがそのことから、社會的事實はそれが價值評價されるときは因果過程として觀察される時とは異つて把握されると云ふことが出て來るだけであつて、それが一般に因果觀察の對象とならぬと云ふことは結論されない。我々はリツケルトに倣つて價值づけと云ふことと價值に關係せしむることを區別しなくてはならない。價值づけはつねに何であるべきかについて問題とする主觀的概念であり、これに反し價值關係性はすべての社會的過程はそれ自身何等かの志向された意味にかゝけられしめられてゐると云ふ事實を單に含むにとどまる客觀的概念である。斯くて嵐によつて飛ばされた屋根瓦が或る人の頭に衝つたと云ふ過程と巧みに狙はれた石が同じことをしたと云ふ過程との間には、この二つの過程は外面的には同じ結果をもつた運動の過程であるにも拘らず、區別が生じる。前の場合には典型的に意味を缺く過程があり、後の場合にはその過程はこれに反し志向された意味を有つてゐる。前者は自然過程であり後者は社會過程である。此の社會的過程は何かそれが諸の價值の體系

へ編み込まれると云ふことによつて初めて、またさう云ふ觀點のもとに於てのみ自然過程とは異つた事實となるのではなく、そのことは單に價值にかゝはらしめられた事象の過程として觀察されるとき既に行はれるのである。蓋し斯かる過程の固有の意義はあたかも投射運動はこゝでは單に石を投げる者の傷つけられた者への特殊な關係から因果的に理解されると云ふことによつてのみ生じるからである。従つてまさに此の過程の因果的考察が存在するのであつて、そこではこの過程はいかにも存在としてまた生起として把握されるのであるが、それは因果性の特殊の・價值にかゝはらしめられた・形態に於てあるのである。因果的社會科學を否定する傾向の論理的缺陷は彼等がすべての意味理解を規範の考察と同一視し、従つて規範性は因果性とは無條件的に原理的に異なるといへ寧ろ偏に因果的聯關の特殊な存在の仕方にも屬するところの意味設定の活動がさうではないことを看過せるところにある。されば自然觀察と規範觀察との區別は意味づけ *Sinnbedeutungen* と目的關係とが存するところに既に始まるのではなく、意味づけや目的關係はそれ自身一種の事象を示すのであつて、それはまづ如何なる價值判斷もなしに意味ある事象として把握されるが、また價值關係性として單純に確定されその原因の探究がなされるところのものである。

斯くて我々は自然概念の論理的に明確な且つ一義的な確立に到達する。我々は自然のもとに因果法則のもとにあるすべての存在の事實及び事象の過程の總體を、即ち存在と事象とを理解するのであり、これに價值づけの總體が、即ち當爲が對立する。價值づけの關聯に對して我々は遺憾乍ら自然と云ふ言葉に對應する名稱を知らない。道德的世界と云ふ表現は十分でない。蓋し價值體系は法律的、審美的、宗教的、形而上的等の態度にも亦かゝはるからである。希臘人達は我々の自然把握はなほ未知のものであつたところの異なる精神の態度に應じて世界の意味ある、美しくさへある秩序を意味する「コスモス」と云ふ名稱をつくつた。然し乍ら我々の自然概念への此の對立要素は今日のコスモスと言ふ言葉の使ひ方には最早附着してゐない、蓋し此の表現はあたかも今日は屢々自然科学の側から用ひられて自然と同じものを意味してをり、たゞその際我々は通例宇宙の測られないこと、ニコスミツシュニた聯關を念頭においてゐるのが實際である。寧ろ存在の世界と當爲の世界との此の二つの世界の對立を「テロス」と云ふ言葉が最もよく表現するかも知れない、蓋しそれによつて此の言葉のもととの意味によつてその名前はつねに同時に最高の價值づけを示すべき終局目的を示すであらうからである。だが他方に於て此の「テロス」と云ふ言葉には目的論(テレオ

（ギギー）の概念の聯想が生じ易く、それによつてまた新しい混亂が生じることになる。蓋し目的論を因果性と對立せしめることは全く誤りであらうからである。今も述べた如くそしてまたこれから明かにするであらう如く、目的論は單に因果性の一種である、即ちある目的から出發し此の目的を實現化するに必要である諸原因について探究が行はれるやうな、さう云ふ因果性の一種である。されば目的論ではなく規範性 Normmässigkeitこそ因果性への實際の對立をなすものである。

我々が與へられたものの價值觀點のもとに於ける觀察の立場に對し實際に一義的な命名を何等もたないにせよ、而も自然とテロスとの原理的な對立を存在觀察と當爲觀察との對立として最後決定的に確立することは極めて必要なことである。そしてそのとき此の意味に於ける自然が謂はゆる死せる自然のみならず有機的自然や人間的社會的自然をも包含することが明かになるであらう。蓋しすべてこれ等の方向に於てはただ一つ存在と事象とが取扱はれるからである。だが此の自然概念の内部に於て此の存在と事象とはいつも同種のものではなく、存在及び事象そのものにして種々の在り方があることが同様に明かになる。そしてそのことによつて自然概念は一つの非常に重要な分化をする、蓋しそれはいつも存在及び事象に

かゝはるわけであるが、そのもの自體は謂はゆる死んだ存在であるか或は生命ある存在であるか或は最後に自己意識をもつた存在であるかいづれかである。斯くて自然概念は單なる死んだ機構と同じものではなく、それは有機體と共に意識をも包含するのである。蓋し此の二者は一定の過程の存在の種類に屬するからである。斯くて我々は無機的自然と共に有機的自然並びに精神的自然の概念をうる。そしてこれ等三つの自然概念のそれぞれに存在及び事象のある特殊な種類が、またそれに應じて因果科學のある特殊な種類が對應するのであるが、そのことは因果性の種類について論ずるならより明かになることである。今我々にとつて決定的なことは實に精神的社會的な生活のみならず、有機的諸過程自體が無機的自然の概念と方法とを以ては些しも把握されえないと云ふことが一方に於ては全く正しく看過しえないと云ふこと、だが他方に於てそのことは我々があたかも有機的現象並びに社會的諸過程については今や自然觀察の立場を一般に放棄せねばならぬであらうと云ふことを意味しはしない、たゞこゝでは斯の種の存在觀察の他の方法が必要であると云ふことを意味するのみ。斯かる根據からして自然の概念を社會的諸過程に對しても亦確保することが論理的に方法論的に重要と考へられる、蓋しこれによつて社會現象は他のすべての自然的なものと原理的に同じ仕

方で、即ち存在としてまた因果的事象として科學的研究の對象となるべきであると云ふ基本的認識が明かにされるからである。斯くして、また此の意味に於てのみ社會科學は自然科學なのであり、それは因果的存在科學であると云ふ意味に外ならない。或は自然についての科學は存在と因果的事象一般についての科學であると云つてもよいであらう。それはその對象とする存在の領域が異なるに従つて或は *naturologische* な、或は *organologische* な、或は *soziologische* な、存在科學であるが、いづれの場合にもその基本的な立場は認識論的にまた論理的に同一であり、たゞ方法論的にのみ存在と因果性の種類の異なるにつれてそのやり方が異つてゐるに過ぎない。

斯くの如く自然概念は存在と事象との全領域を含むのであり、それはその意味で群り集る原始星雲の運動から始めて社會的現象に到るまで統一的ではあるが決していつも同種ではない概念であるが、同じことが因果性について妥當する。因果性とはそれによつて我々が事物の存在に於けるあらゆる變化を或る他のそれに先行する變化にかゝはらしめ、後者を原因とし前者を結果とすると云つたやうな思惟形成を云ふのであるが、此の因果性も亦事象のすべてその領域にとつて全く統一的に把握されねばならない。だがもとよりそれ故に因果性はすべて

ての過程に對して同一種類のものである必要はなく、また事實さう云ふことはない。因果性の種々なる形式の區別こそ存在科學の二部門としての自然科學、社會科學の區別に對する本質的な方法論的な前提である。

右のことを正しく理解するために我々はまづ、因果性は種々な存在領域に於けるその形式の相違にも拘らず思惟形式としてのその本質に於ていつも同じものである、即ち結果のその原因との嚴密な例外ない結合であることから出發しなくてはならない。このことは因果問題の中核であるやうに思はれる。周知の如く因果概念はデビッド・ヒューム以來たえず認識批判的また方法論的勞作の對象となつてゐる。因果概念がまづ經驗によつて獲得されたものか或はアプリアーリなものかと云ふ經驗論と認識批判論との論争にはこゝでは立ち入る必要はない。それが經驗論者の不十分な認識批判的思惟の結果たるとき愈々以てさうである。根本に於て此の問題はカント以來既に決定されてゐるのであつて、カントは一方非常に鋭く自身次のことを説いたのである。即ち因果的思考は自明の如く心理的にはたゞ經驗に於てのみまた經驗を通してのみ展開される、然しそのことは人間意識の形式にはあらゆる變化をその他同様な事情のもとに於てよつて以て不可避的にそのことが起る何等かそれに先行するものと

かゝはらしめる思惟必然性が屬すると云ふことによつてのみ可能なのである。斯くして原因と結果とを結合する概念は決して單なる經驗から成立しえないと云ふかの無例外性と普遍妥當性との性格をうるのである。蓋し單なる經驗は單なる規則性、蓋然性、習慣を與へるより以上のものではありえない、然るに意識自體の諸形式と聯關あるすべてのものは、其等の形式自體があたかもそれ自身何か普遍的なものであるが故に普遍妥當性をもつものでなければならぬことは明かである。經驗論者の不斷に繰返される誤解を別として、哲學者並びに自然及び精神の研究者から因果概念に對してなされた一世紀以上に亘る批判的な論及は非常に著しい結果をもち、因果概念は次第に神祕的な或は形而上的な把握乃至附隨的意義から解放されるに至つた。そのことに對しては特に次のことが與つた、即ち近代の科學的因果思考は因果關係をあたかも原因が何等か衝動的壓迫的乃至牽引的諸力によつて結果と結びつけられてゐるかの如く實體的に考へず、或はまた因果關係をあたかも原因を以ていはゞ結果に放射する神祕な精靈の如く動態的にも考へず、たゞ時間に於ける繼起的な變化の恒常的な關係以上のものであつて、それは出來うべくんば數學的表現にもたらさるべきものと考へたのである。因果關係からすべての形而上學的な要素を追放すると云ふことこそキルヒホフ以來特に

批判的自然研究者をして自然諸過程について單にそれを完全に記述すると云ふことに代つてそれを説明すると云ふことに向はしめたところのものである。斯くて我々は謂はゆる原因の説明によつて因果過程の本來の「内面的」聯關を些しも實際に明示しうるものではない。従つて我々は原因が如何にして「その結果を生み出す」かを告げることができないと云ふことになる。寧ろ諸過程を或る他のそれに先行する諸過程、廢棄することのできぬ歸結に於て結びつけられてゐる過程に還元することのみが試みられることとなる。この廢棄^{ウツアッフェン}することのできぬ歸結を確定することが經驗的研究の任務であり、これに反し斯かる歸結が一般に存在する、また如何なる變化も原因なしには不可能であるからそれぞれさうした歸結が存在しなくてはならぬと云ふ前提、それは我々の意識自體の思惟必然性に屬する。そして此の思惟必然性の裡に因果關係の本來の核心は與へられてゐる。

従つて屢々多くの近代の實證主義者或は相對的論者に於てみられるところであるが、因果概念からその神祕的なまた形而上的な要素を批判的に克服し去ることは因果概念そのもの止揚に導き、我々は今日に於てはたゞ最早機能性について語るのみが許されると云ふやうに考へることは、認識批判の行き過ぎである。(云ふまでもなく此の考へ方は原因・結果

の概念は現象相互の依存と云ふ概念に代置されねばならぬと説いたE・マッハの如きをその代表者とする)それは認識批判として非常に缺點あるもので尠くもその二つのことを看過してゐる。

第一に機能的結合はあたかも因果関係にとつて本質的なもの、即ち時間 に於ける歸結 *Folge in der Zeit* を抽象してゐる。機能的關係にとつてあたかも此の時間的關係は全くどうでもよいものである。それはあたかも對向する角の増大に際して三角形の邊は大きくなると云つた場合に典型的に示されるが如くである。私がまづ初めに角を大きくして考へるかまづ初めに邊を大きくして考へるかと云ふことはその場合全くどうでもよい。機能的依存性はただ一點に於て、即ち繼起する二つの變化が因果性と同じの嚴密な廢棄することのできない關係性を含んでゐると云ふことについてのみそれは因果關係と一致してゐる。そしてそれが機能關係と因果關係とがそんなにも屢々相互に等しいものとされ混同される理由である。だがそれなればこそ二つ乃至それ以上の變化の機能的相互依存に於ては時間關係は何等の役割をしてゐないと云ふ基本的な相違が注意されることが愈々以て必要である。これに反しこの時間關係を抽象することが不可能であつて、一つ乃至數多の變化がつねに他の一つ乃至數多

のものに先行するものと考へられねばならぬ場合にはいつも因果關係が存在するのである。因果概念は機能概念に解消されたとする考へには、つねに兩者の混同があるのであつて、本來より以前の因果聯關の實體的な把握が單なる關係概念に變化したと云ふことが考へられてゐるに過ぎないのである。實體概念の關係概念への發展を説くことは正しい。(例へばカンテーラーの諸著をみよ)。だが我々は同時に關係の關係と機能の關係とは同一ではないことを明瞭に知らねばならないのであつて、關係と云ふとき我々は繼起する變化の必然的な關係の事情を理解するのであつて、關係は或は機能的な或は因果的な或は目的的な關係 *Finalbeziehung* でありうる。すべての場合に於て關係概念の介入は、我々が變化を最早事物の實體的な性質乃至力に還元することをせず、それを單に意識の種々な方向から必然的に生ずる思惟聯關として偏に考察しようとするものであることを意味するのである。

第二に機能的關係の概念は因果觀察の主要課題であるやうに状態の單なる變化を目標とせず、つねに或る與へられた全體に於ける變化のみ目標とする。機能聯關の存立にとつてその機能が取扱はれるところの全體なるものの思惟的前提が必要缺く可からざるものである。機能的依存はまさに此の全體への關係性からしてのみはじめて生ずるやうなさう云ふ必然的

變化の提示である。これに反し因果聯關をそのものとして確立するには全體なるもの前提は何等思惟必然性ではない。因果聯關は變化それ自體 *Veränderungen an und für sich* の間に何等の全體聯關も存立しないところでも、従つて例へば一都會が噴火によつて廢滅せしめられると云つた場合にも、而も大抵の場合確立されうるのである。すべての因果性は閉ざされた自然因果性——その内部に質量マッセと精力エネルギの分量がとゞまつてゐる——に還元されると云ふ理論的考へ方自體さへ——此の考へ方が今實際に自然科学的思惟の前提となつてゐるか否か、またそれが如何に心理的事象と結びつけらるべきかはこゝでは取り上げる必要がないであらう——、従つて閉ざされた自然因果性の觀念そのものさへ必ずしも何か一つの有機體と云つた意味で一つの全體を示すものではない、蓋し實際精力エネルギと質量マッセの不滅性にも拘らず、而も個々の因果過程はそれによつてなほ共通の機能聯關の裡にもたらされないからである。それにも拘らずあたかも社會科學的領域に於て因果觀察が終局的に機能的觀察となるなら、その理由は社會科學の基本的な概念即ち社會化ソシヤライゼーションの概念が同時にそこでは何等の孤立された事實も最早可能ではないやうな存在を示す、即ちすべての存在の状態と存在の過程とはまさに社會的存在を示すところのたゞ一つの統一聯關の裡に於てのみ可能であると云ふやうな

存在を示すと云ふことにあるのである。而してそのことは何故に因果性が精神的II社會的領域で特殊な形式をとるか云ふ理由である。それはそれ自身機能性とはならずたゞ社會的機能聯關の内部に於てより多く働くのである。(此の問題に關してはオットマール・シュパンの因果性否認の學說を批判する必要がある。彼は因果性を機械論と混同してゐる。)ともあれ因果關係の本質的なるものはあらゆる變化は一つ或は數多のそれに先行する變化にかゝはらしめられ、前者は後者の必然的な歸結であると云ふかの必然的な思惟關係である。此の關係はそれが單に物理的なものであらうと或はせいぜい精神的なものであらうとあらゆる種類の變化に完全な嚴密さを以て例外なくあてはまるのである。我々が事象の異なる領域に於ける因果性は異なる形式を示す、従つて我々は特に人間的なまた社會的な因果性について語ると云ふとき、因果性が何か外的自然の諸過程から遠ざかるにつれてそれだけ嚴密に例外なきものでなくなると云つたやうなことが考へられてゐるのではない。これは屢々ある誤解である。我々は心理的なまた人間的な因果性も亦自然的因果性とまさに同一の嚴密な「無容赦」を有つてゐると云ふ根本的な立場から出發せねばならない。このことはカントが人間の行爲もそのもとにそれが行はれるところのすべての外面的内面的事情を知悉さへすれば

あたかも太陽や月の蝕と同様に完全精密に豫め測ることができると繰返し強調したとき、彼は鋭くそのことを述べてゐたのである。此の意味に於てすべての事象の嚴密な因果規定性と云ふことについて人間的なまた歴史的に社會的な生活は自然の諸過程に對して些しも例外たるものではなく、まさにそれは存在、事象であり、一片の自然なのである。但しあくまで精神的自然である。而して物理的自然に對してこゝにみられる因果性の相違は結果の原因に對する關係の性質が異ると云ふだけのことなのである。

精神的に社會的領域の因果性が極めて嚴密性に乏しくまたいはゞ柔軟性に富んでゐると云ふ一般に行き亘つてゐる觀念は、屢々こゝではたゞ「傾向」についてのみ語ることができると云ふやうな事となつて現れる。通常これによつてひとは此の傾向と云ふことは社會や歴史に於ては自然に於けるやうな因果法則の鐵の如き必然性が行はれないと云ふことによつて特徴づけられるものと考へてゐる。然しこのやうに考へることは表面的であり誤つてゐる。蓋し「傾向」と云ふ言葉は因果聯關そのものの嚴密さの弱められたものとして考へることは許されない。因果聯關は自然的領域に於ても社會的領域に於てもまさに同様に嚴密なものである、そして「傾向」と云ふ言葉は社會的事象の具體的な複合を問題とした場合嚴密な因果

聯關そのものの精密な確定が不可能なときのみかゝはる。だが此の不可能と云ふことはそれによつて社會的因果性が自然的因果性から區別されるやうな何等原理的なものではない。それはまづ第一にこゝに働く諸原因は動機としてその内面性の故に全く剩す處なく叙述されえないと云ふことと共に社會的事象はつねに個々の因果系列の複雑な構成體を示すと云ふことの結果たるに過ぎない。第二にこゝになほ次のことが特に考察せられる。即ち、社會科學は決して自然科学のやうに、概念的に思惟に於てまた人爲的に實驗に於て孤立せられうる個々の抽象的な因果系列を問題としない、それはつねに個々の因果系列が流れ込み相互に錯綜する諸現象の具體的歴史的な複合を對象とすると云ふことである。されば社會科學はいかにもその對象を理論的に支配する目的で社會的複合をその個々の因果系列に分解しなければならぬが、自然科学に於てはこの分解にとゞまつてゐることが出来るのに對して、また因果諸系列の具體的衝突の事實的結果は自然科学にとつては全くどうでもよいことであるに對して、社會科學にとつてはまさにさうではない。斯くて例へば自然科学の認識目的にとつては液體靜力學的なまた液體力學的な抽象的法則の探究が本質的なものである。然しその法則が或る池——その表面は風によつて動いてゐる、或はそこに我々が石を投げ込んだ——の具體

的な小波に對し如何にかゝはるか、そのことが假令具體的な波の線及びその交錯の計算が自然科學にとつて原理的に解きうるテーマであるにしても、それは自然科學の認識目的にとつて全くどうでもよいことである。これに反し社會科學に於てはあたかもこの具體的な波の動き、その行程その交錯が問題なのであり、それを理論的に支配することが努力される。そしてそれ故社會科學の課題は複雑な社會的事象を個々の因果系列に分解することによつてかちえられた因果認識をその成果を結合することによつて出来るだけ全體の因果的理解にまで擴げたときはじめて成就されるのである。だがところで個々の因果系列は完全にはもたらされないし、また個々の因果系列の衝突を完全に見透し豫測することもできないから、そこで社會的因果聯關の精密な確定からの偏向が生じ、それによつて我々は因果性の必然性についてはなく傾向の複合について云々するにとゞまることとなるのである。當然思惟の裡に於てのみ孤立せられる個々の因果系列の内部にのみいつも嚴密な因果聯關従つて例へば「純粹」資本主義から生じる發展の必然性の指示に於ける如き嚴密な因果聯關は存立する。斯かる純粹な因果系列の探究はまさに近代資本家社會の運動法則の發見に於て行はれてゐるやうな「抽象的」方法に屬する。斯かる「純粹」な因果聯關の抽象性は社會科學の規實に科學的な

性格を減らしうるものではなく、こゝに自然科學との相違は些しも存しない、寧ろ事物の實在性に近づくと云ふために社會科學にとつて有利である。蓋し自然科學は一般にたゞ抽象的な法則を以てのみ仕事をする事、自然科學が設定する如何なる自然法則性もそれが概念的に述べられてゐるやうには具體的には決して行はれないこと、は多く看過されてゐるからである。例へば石の自由落下についての法則は、それが全く無抵抗の空間に行はれるものであるから、現實には決して現れないまた現れ得ない一つの過程を取扱つてゐる。それ故普遍的性格をもつすべての科學的な因果法則はマックス・ウェーバーの語を用ひれば理念型である、そしてその際たゞ此の概念がウェーバーの考へた如く單に社會科學のみならず因果科學一般に行はれるものであると云ふことが注意されるべきである。従つて「傾向」と云ふ言葉は斯く解するならば、まさにすべての聚合する個々の因果系列の嚴密な因果規定性を前提とする、即ちそれ以外一般に一つの傾向は確定されないものである。その將來の經過に關する精神的意志的事象は一般に嚴密な因果規定性に從はぬと云ふことを多くの批評家達が恣まに考へてゐる限り、従つて「傾向」と云ふ言葉が歴史的過程を豫め規定することの原理的に不可能なことを表現すべきものとするとき、確かに傾向と云ふ表現によつて社會の發展理論としての因

果的科學の可能性が問題とされるのである（此の問題は自由意志の問題にかゝる）。

因果性は斯くそのすべての現象形態に於て統一的ではあるが同種ではない、それは寧ろ三つの種類にわけられる。今椅子にかけてゐる一人の人を考へよう、如何なる仕方で此の人をその椅子から離れさせることができるだらうか。それは三様の仕方可能である。先づ第一には彼を椅子から落ちる程強く突くことである。第二には何か椅子蒲團を通じて衝動を與へて叫び聲を擧げて飛び上らしめることである。第三は彼の名を呼んで呼び出すことである。これ等三つの過程は結果は同じであるがその過程の在り方は異つてゐる。第一の場合の結果は單なる機械的な衝動によつて惹起された。その際椅子にゐた人間自身は彼がこの働きを蒙る以外すこしも參與してゐない。彼はその働きを些しも意識して忍ぶことを要しない、と云ふのは彼は衝撃の瞬間に眠つてゐることもできたからである。此の場合人間の意識は何等の役割もしてゐない。他の二つの場合何等かの意識された原因の把握なしには遂行されないと云ふことによつて第一の場合から區別される。何故ならば第二の場合衝動はそれが感ぜられたときのみ人をして飛び上らしめるからである。もとより第一の場合にも衝撃は感ぜられたと考へることが出来る。だがそのことは效果に對しかゝはりない。例へば何等衝撃を感じ

なかつたであらう麻痺した人間と雖も椅子から落ちるのである。これに反し麻痺してゐて衝撃を知覚しないものは飛び上ることをしないであらう。此の場合さうした動作を生じた原因は人間によつて感ぜられたに相違ない。だがそれ以上の意識された態度は確かに必要ではない。感覺は運動を反射的に解き放つ刺戟として働く。これに反し第三の場合には呼び掛けの單なる音響の感覺より以上のものが必要である。音響、こゝで云へばその人の呼び名は刺戟として働くのではなく、呼び掛けとして理解されてはならない。そして此の呼び掛けは呼ばれたものの爾餘の意識状態との聯關に於て彼の裡に多かれ少かれ明瞭に把握された呼び掛けに應ずると云ふ決斷を惹き起したに相違ない。要するにそれは起立に對する動機として働くことが出来ねばならない。上述の三つの過程の在り方を相互に比較するとき、第一の場合はその働きは一つの純粹に機械的な働きであつて、それに人間の意識は一般に參與してゐない、第二の場合には刺戟の働き、第三の場合には動機の働きであつて、何れも意識の外部に於て全く理解できないが、またそれ自身さらに異なる度合の意識參與を示してゐる。簡単に、第一の場合には因果過程は意識なしで、第二の場合には意識の裡に、第三の場合には意識を媒介として行はれたと定式化することができよう。第一の場合には人間は全く彼の意識から

は獨立の因果聯關に従ふのであつて、それは狹義の自然因果性であり或は無機的因果性であると云ふことができる。第二の場合は假令それが植物的刺戟意識に過ぎないものであるにせよつねに一つ意識に於てのみ可能な因果聯關が取扱はれる。それは有機的因果性の段階のものである。而して第三の場合に於ては結果をもつべきすべてのものは意識して把握され精製され理解されてゐなくてはならない。それは本來心理的因果性であり、それぞれその人間的形式に於てあり、それについてのみ我々は體驗をもつことができるのであるが、またそれは同時に社會的因果性である。

アドラーは社會的因果の問題を斯く把握すると共に、偶然及び自由意志の問題をも取扱つてゐる。彼は我々はさうしたものの存在を知らないが故に無原因性を偶然とは稱しえぬと云ひ、その各々は如何なる原因法則からも導出できない二つ以上の作用の衝突を偶然と呼び、すべてが必然であるかすべてが偶然である機械論を退け、偶然は我々の認識の不十分さから必然的に與へられる事實であるとなし、而も我々の因果認識の進歩によつて克服し盡されるものではないと云ふ。斯くて彼は偶然が歴史に於て經濟的必然性の中に促進的乃至停止的契機として働くことを認めると共に、偶然が歴史觀察に於て占める役割を規定し、各事件はそ

の時々の全歴史狀態の所産であることを力説する。そして「強制されたにせよ而も彼は欲したのである」と云ふ法律家の言をひいて自由意志の問題を取上げ、それが因果的に規定されたものであることを指摘する。即ち、意志過程について因果考察と體驗聯關との區別を力説し、すべてを理解するとはすべてを許すことのみならずすべてを因果的に理解することであると云ひ、機械的な意志の豫定はできないが、すべての外的及び内の事情の認識は心理的に豫言を可能ならしめるとなし、更にポール、ハイゼンベルク等の物理學の新説を援用して因果性は豫定性 Vorherbestimmtheit ではなくて豫定可能性 Vorbestimmbarkeit ではない事、「すべてのものは豫定される」と云ふ命題はそれに對應する豫言^{フオムフツサヤグ}によつて「實證」されはしないけれど而も無意味にはならぬ事を説き、思惟の形式的法則性のみならず意欲の形式的法則性があり自由な意欲は當爲を意志するものであるとして個々の意欲が社會的に矛盾なき意志體系に參與すると云ひ、社會的因果聯關の認識に依て導かれる意識と感情を規制して當爲に依て導かれる意識とが對應關係にあつて必然と自由とが統一される事を説く。

我々は人間的行爲、即ち歴史的な生活の領域に於ては結果が豫め人間の意識の裡に何等かの仕方で把握されてゐたときにのみその結果が存在しうる、またそれぞれ原因が何等かの仕方

で人間の意識の裡にとりあげられてゐないなら全く働くことは出来ない、さう云ふ因果性の形式を偏に対象とするのである。人間の因果性の此の意識形態は意志である。人間の行為の領域に於ては意志によつて起らなかつたやうな如何なる因果的結合も生じ得ない。因果的に必然的なものは人間によつて意欲せられたものであるが故に専らそれぞれ客観的觀察の立場から意欲せられたものでなくてはならぬ。結果はつねに同時に目的として體驗せられ意欲の形式に於てのみ完成される。即ち願望、計畫、傾向及び思慮の闘争として、決斷或は發心或は斷念として行はれる。従つてこれ等獨自の事態に際しひとがこのものを彼の主觀的體驗の側面を彼の客観的な事象の側面から區別すると云ふことはその因果過程としての理解にとつて無條件に必然的なことである。何故なら體驗の側面には因果關係の一片だに現れることはない。此の體驗の側面からみるなら全過程は全く一つの意志過程として經過するのであつて、ここでは各個人は自分自らを自由に決斷する要因とみなし、とりわけ彼の將來の決斷をなほ未だ未決定のもので多大な程度にその任意にかゝつてゐるものとみるのである。これに反し事象の側面からは、此の意志の全過程は、とりわけその經過の將來に到達する部分に關してさうであるが他のすべての事象の過程と同一の因果的必然性に従ふのである。たゞ

こゝでは理論的觀察は、それなくば此の過程系列の因果聯關を確定しえないところの動機構成及び目的觀察の特殊の形式を導入せねばならないのである。我々はこゝで精神的自然の概念が如何に効果あるかを理解するのである。蓋し精神的自然の概念は一方に於て意志の諸過程をも單に目的諸過程としてではなく存在の過程として把握することをえしめると共に、他方に於てそのことは我々が一つの特別な存在、即ち既にそれ自身に於て目的に従つて價值づけにかゝはらしめられてゐる存在を基礎におくときのみ可能となることを我々に示してゐる。シヨウベンハウエルが動機決定モティヴァチオンを認識によつて經過する因果性であるとしたとき、その見解は、心理的因果性はつねに價值づけによつて經過する因果性であり、それによつて人間の行為の目的、價值づけ、理想への全關係づけは精神的因果聯關の内在的な要素となると云ふことによつて補はれてより明確なものとなるであらう。斯くて因果的必然性は精神的事象の領域に於ては機械的必然性とは異ると云ふことを理解せしめる精神的自然の概念が明らかならしめられた。例へばシユパンの社會學にみられるやうに因果性の種々な形式の混同は慎しまれねばならない。因果性は即ち機械的必然性ではない。然し乍らすべての因果事象の内在的價值關係性と云ふ事によつて未だ精神的自然の特性は完全に盡されたものではない。す

すべての精神的なものは一般に何かそれ自體として、全く個人的なものとして存在してゐるものではなく、それはつねに同種の他の精神的事象と結合してのみ存在してゐるのである。而して此の結合は單に外面的なものではなく精神的な生活そのものの本質に屬する性質であつて、個人意識そのものが他の意識への關係なしには考へえられないものなのである。すべての人間的な思惟及び行爲の他の人間の思惟及び行爲へ廢棄することができないやうに關係してゐる (unaufhebbarer Bezogenheit) と云ふことはまさに精神的な自然の社會的性質をなすものであつて、それは個人意識の社會化の裡に基礎づけられてゐる。斯くて精神的な自然は本質的に社會化された存在なのである。このことは精神生活の外面には一般に現れないやうな一つの存在の仕方を示すものであつて、精神的な自然の理解のためにはさらに社會化の概念の理解が必要である。(Vgl. Max Adler, Lehrbuch, Bd. 1. Kapitel 12. u. 13. Bd. II. Kapitel 8. u. 9.)

アドラーは如何にも社會科學が科學として成立しうることを論證してゐる。然し彼の所論も亦新カント派の立場を出づるものではなく、その議論は抽象的形式的に社會科學の可能性を云ふのみであつて、未だ具體的現實的ではない。それが現實的具體的でないのは、彼の立場が些しも歴史的でなく、認識論的な意識の立場から一步も出ようとしないのみか、率直に

經濟學の中に身を投じないからであつて、その言辭の急進的なるに拘らず彼の經濟學の實際の認識については極めては疑はしきものがある。(河合榮治郎『在歐通信』二七二頁参照) これはアドラーについてのみ云はれることではないが、科學方法論、社會科學概論を論ずる著者がそこで取扱はれる學問についての具體的認識を缺いてゐる場合が屢々あるが、それは議論に重大な缺陷をもたらさずには止まない。このことは我が國の多くの哲學者が流行の如く國家、社會、經濟のことを筆にするやうになつてから特に著しい弊風であると考へられる。それは單に議論を抽象的ならしめるにとゞまらず、無意識の裡に重大な誤謬を冒さしめる。

紙數・時日等の關係で十分展開できなかつたので左の註を加へておきたい。

(註) 『國民百科大辭典』(富山房・昭和十一年) について法則の項をみるに「事物相互間ニ存不變ノ關係。ソレハ不變ノ關係トシテ事物ヲ支配スルト同時ニ、マタ人々ニ依テ普遍時ニ承スル認セラレルコト、即チ普遍妥當性ヲ要求スル。自然法則ト規範法則トニ區別スル仕方モアル。」と記載せられてゐる。これがまづ世間的な解釋であらうが、自然法則・規範法則を分つことも或ひは中世紀以來の宗教的傳統であるかも知れず、この點について寧ろ兩者は決死の闘争を行つたと考へられないであらうか。即ち率直に云へば自然法則の側が勝利をえた

のである。また「事物相互間ニ存スル不變ノ關係」と云ふ説明も餘りに自然科学的である。即ち不斷に繰返す現象から法則がその本質として抽象されて來たにしても社會の法則は勿論自然の法則にしても何れも歴史法則であることが忘れられてはならないであらう。

なほ法則論についての別の見解は次ぎの如く纏められてゐる——「因果法則、因果律、因果關係ともいふ。「Aの現象が現存する場合には必ずB現象が生起する。Bの現象は、既にAの現象が現存する場合にのみ、生起する。」かゝる二現象間の必然的繼起關係が恒常的に存在する場合、吾々はA現象を原因、B現象を結果と呼び、その繼起關係を因果性と稱す。だがこの場合、一現象が他現象の「後に」起ることは必ずしも一現象が他現象「によつて」起ることを意味しない、といふ懷疑論からの批難がある。然し因果性は純主觀的な概念ではなくして、客觀的現實の反映に過ぎない。吾々の「現實への働きかけ」即ち行爲・實踐は、それが單なる繼起性であるか因果性であるかを檢證する。一現象がある條件の下に生起する場合、吾々はその條件を作り出すことによつてその現象を再生産し或はその現象に豫定の方角と大いさを與へることが出来る。勿論世界の一切の現象は相互に依存し關聯するが故に、因果的關聯は世界的總關聯の一部分に過ぎない。従つて因果性なる概念は、諸現象の客觀的

總關聯性を幾分か單純抽象化し、近似的にそれを反映するものに過ぎぬ。だが個々の現象を理解するためには、總關聯のうちからそれらの現象を抽出して孤立的に考察せざるを得ない。また諸現象の總關聯性からして、機械的因果性の誤謬が明白となる。機械的因果性の一例は、一の轉がる球を打つ場合である。その場合、打擊を與へた第一球は停止し、打擊を受けた第二球は運動を始める。こゝでは、運動が外部からの衝擊によつて起され、また原因はあくまで原因、結果はあくまで結果として不變である。之に反して辨證的因果性では、運動が「自己運動」内面的發展として考へられ、また一形態の他形態よりの發生過程として新な質の形成過程として考察される。「認識批判の立場は斯くの如き見地をもよく包容しうるであらう。なほ「社會的總再生産過程に關する函數法則」——「これこそ經濟學的法則の眞實の性格である」(楠井隆三、經濟法則の論理的性質、經濟學論集・昭和十二年十月)と云つたやうな見解を見受けるけれど、因果法則が函數法則に變つて行つた自然科学の風潮をそのまま社會科學にもたらさうとしたもので、經濟學に於ける法則を斯く理解することは數理學派の支配と共に一般化して來てゐるが、因果關係は社會科學に於てはすぐれて行爲するものを含んでゐなくてはならないのであつて、行動の方針を決定すると云ふやうな課題を課せられる場合、函

數關係では役に立たないことを知らなくてはならない。また函數關係では再生産と云ふこともその人間關係が剝奪されて仕舞ふであらう。これについては樺俊雄氏の論文「社會法則に就て」(社會哲學社會科學評論・第一輯・岩波書店)「社會法則について」(同氏著「世界觀の問題」收載)と共に、西南學派の個別的因果律の研究からマックス・ウェーバーの業績を指摘し、彼とディルタイとの理解の概念を比較し、さらにフッサール、ハイデッガーに關説して社會的法則を人間學的規定として解明し、客觀的なるものは衆人の見解ではなくて衆人の見解の中に表現される自然或は社會における諸關係であることを述べて、從來社會に於ける法則が單に社會の表面を去來する波動の把握に過ぎなかつたことを説き、眞の社會法則を其等の底を流れる・人間の意識から獨立した・物そのものの連關に還元することを説いた本多謙三氏のすぐれた論文が我々に教へるところ大である。(上述、塚本兵七、社會における法則、本多謙三「哲學と經濟」附録年譜・第二頁參照)マックス・ウェーバーの客觀的可能^{II}適合的因果の因果歸屬論はルカッチにも影響を與へ、ルーダス、デボーリン等から批判を受けたがそこには社會的な生産力の發展から遊離した單なる理論家と一切の客觀的なるものの無視とがあつた。「經濟と社會」に現れたウェーバーの古代社會の認識は素晴らしくその歐洲大戰に際しての

獨逸國家に對する分析は鋭かつたけれど、ウェーバーの考へ方は飽くまで形式的であり經驗的であり新カント派に屬せしめるのは酷であるがなほその派のもつ缺陷を免れてゐなかつた。主觀主義相對主義は彼に執拗につきまといつて離れなかつた。従つて彼の因果歸屬論も「人間はなぜ死ぬのであるか」と云ふ問に對し「今まで生れた人は皆死んでゐるから」(林蘆博士)と云つた如き集團性乃至大衆性ある解答を與へてゐない、こゝに彼の「悲劇」は潜むのである。問題は彼が人間の肉體を輕蔑したことにその一端はあるであらう。破綻は彼の理解社會學なる問題の立て方に始まる。

一般に例へば第一次歐洲大戰の原因と云へばあのセルビアの青年のことときめて仕舞つてあとは近因とか遠因とかを云つてゐるけれど、既に起つて仕舞つた事件について、たゞ過去に溯つてその條件を求めると云つた考へ方はその觀點の如何により無限の溯及を生むことになるのであつて、客觀的なるものへの顧慮が必要で、此の場合獨逸及び露西亞に於ける資本主義の發展、セルビアの状態——「この暗殺をセルビア政府が豫知してゐたことは、後になつて明かにされたが、當時オーストリアの上下は、裏面の眞相は判明しなかつたけれども、直ちに之を以てセルビアの責任なりとし、七月二十三日セルビア政府に嚴重な通牒を發し、

四十八時間以内にその回答を迫つた。」(大類伸、改訂版西洋史新講、七七一頁)と云つたやうな事態についての認識が必要である。ウェーバーが因果歸屬を行ふのに經驗科學的な法則の知識を必要としてゐることは謂ふところの經驗科學が最早文字通りの經驗科學ではなくて、客觀的な社會の科學を必要とすることを物語つてゐる。

なほ法則の問題に關して取り上ぐべき重要なことは自然科學の問題であり、こゝに社會思想との關聯が生じる。もとより事物の原因が判明すれば事の起りがわかつたのであるから、その事物に對する對策、云つてみれば政策は當然に立てられる筈である。我が國に於ける問題としては地震、落雷、大風、水害等の問題である。地震に關しては大正十三年七月發行の石原純氏著『現代の自然科學』二〇九—二二二頁に「地震は豫知し得べきや」、また昭和十五年六月發行の原田三夫氏著『最新の自然科學』二三五—二四四頁に「地震豫知法の進歩」なる説明があり、何れも從來の我々の考へ方の非科學的なることを指摘し、雷に關しては中谷宇吉郎氏『雷』(岩波新書)その他富山房『國民百科大辭典』の「雷雨」「雷雨電氣」の項——藤原咲平氏に『雲を掴む話』『氣象と人生』『天文や氣象の話』の如き通俗書あることは周知のことである——また大風に關しては同辭典の「颶風」「颱風」の項、また大谷東平氏

の「暴風雨」(岩波新書)あり、何れも通俗的に述べられてあるが、そして最近の科學獎勵の風潮に沿つて一般向きの科學書が多く見受けられるやうになつたが、從來自然科學者が官廳に一切を委ねて社會の問題を顧みない風があり、因果關係についても徒らに過去の記録をとり單に道德的に心掛けをよくして自然災害に對しようと思ふ遣り方で、社會的な原因からさう云ふ災害が起つてゐることに眼を向けることが殆どない缺陷がある。このことは國土計畫の問題と結びついて十分考慮されるべきで、風土、氣象の克服と云ふ方向に一時も早く頭が向けらるべきで、此の點近藤康男氏の「農業災害論」(日本評論社・新經濟學全集)の如きすぐれた論文のあることを指摘したい。年々風水害による我が財政の負擔の莫大なるを思へば、保險的な考へ方より進んで地震政策、落雷政策、氣象政策等に着手するべきである。それは懸つて我が政治事情と資本蓄積に依存するのであるが、斯くて結局法則らしい法則は(1)生物進化の法則の他(2)資本蓄積の法則、(3)萬有引力の法則、及び(3)客觀の法則と名づけらるべきものとなるであらう。その他機能法則と一般に云はれてゐるが如きものが數學に於てみられるが其等が自然科學に屬することは云ふまでもなく、資本蓄積の法則を媒介として人間集團によつて驅使されるべきものであることは今日既に或る意味に於て常識となつ

ておることであり。

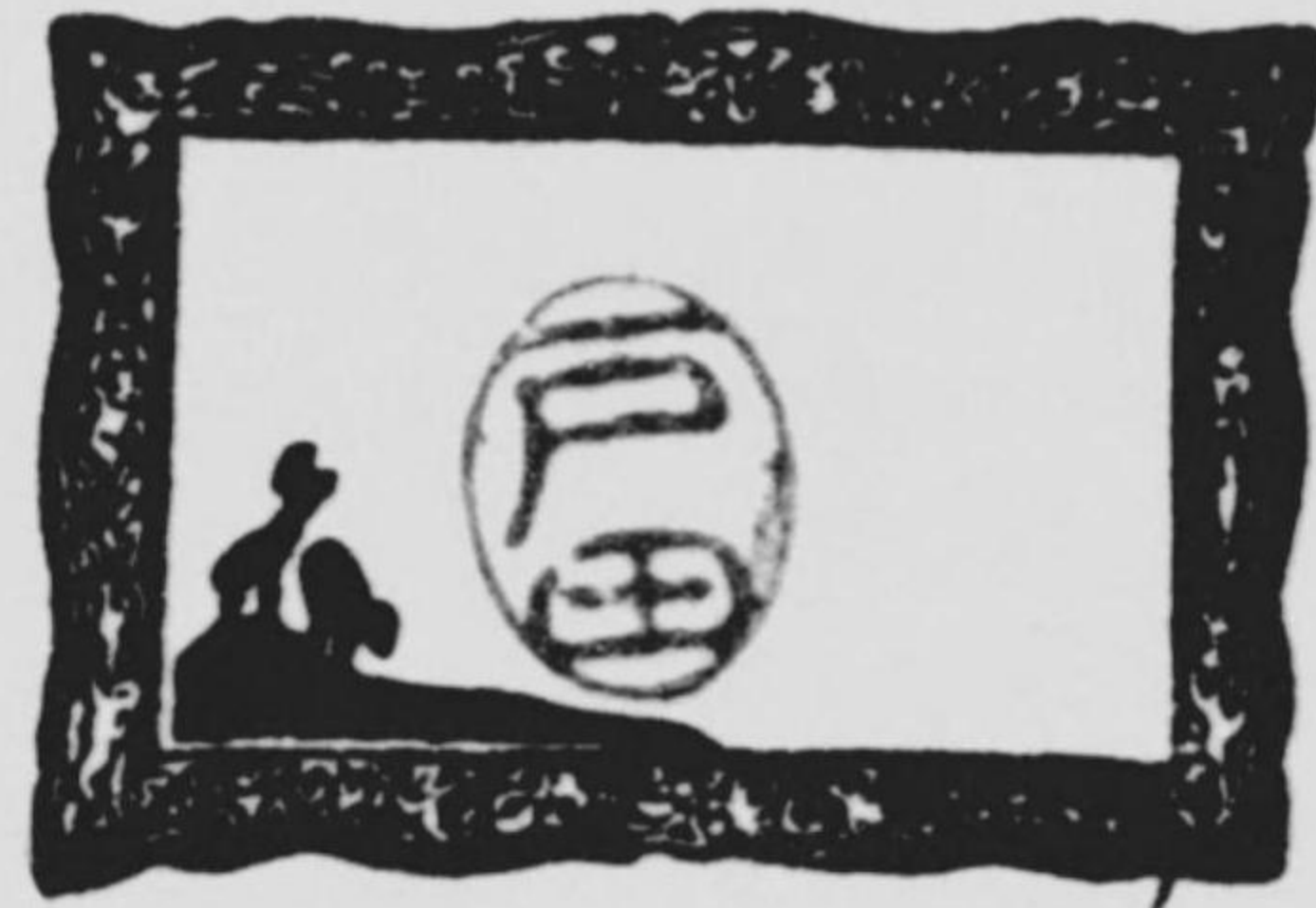
参考文献

經濟哲學に關する主要な文獻については既に上巻に於て述べた。こゝでは本書の内容に鑑みて主として經濟社會學に關するものについて述べるなら、私自身「協同組合社會學論の一齣」(經濟學論集・昭和七年八月)「協同組合とオッペンハイマーの『社會學體系』」(經濟學論集・昭和七年十二月)「經濟社會學について」(經濟學論集・昭和八年八月)「經濟社會學論のために」(知性・昭和十六年九月)等をものし、別に佛蘭西の經濟社會學については「現代思想概観」(昭和十四年・三笠書房)の中で、ドゥンクマン・ザウエルマン派の經濟社會學については「現代經濟學の危機」の解説の部で紹介並びに批評をして今日に到つてゐる。その他E・ハイマン「經濟學理論の社會學的豫備概念」(經濟學論集・昭和十一年八月)「經營社會學」(經濟學論集・昭和七年四月)の如き紹介がある。これ等を纏め用語の粗雑なるを訂正し財政社會學をも併せ體系を整へることは私に課せられた仕事であるが未だ果してゐない。最近に於て高島善哉氏がすぐれた論作を發表されてゐるが、問題はなほ今後に残されよう。傳統的な社會學の立場からの經濟社會學の試みに北野熊喜男「經濟社會學の基本概念」(經濟論叢・昭和十六年九月)の如きものを代表とする。然しさうした形式社會學的立場がどれ程生きた歴史に即して

あるか疑はしく、寧ろ經濟社會學の代表的文獻としてはマックス・ウェーバーの大著『經濟と社會』をあぐべきであらう。その他日本評論社の『新經濟學全集』に於ける如く經濟と宗教、經濟と法律、經濟と國家と云つたやうな經濟と他の社會現象との關係を論ずるものが經濟社會學であるかどうかは極めて疑はしく、シュモラー、ゾムバルト等の社會學的經濟學も經濟社會學と云へるかどうかも問題である。一般に經濟社會學と云はれるものについての文獻は、松本潤一郎『日本社會學』（時潮社）その他日本社會學年報『社會學』（岩波書店・各年度）について参照されたい。外國語のものについては以上挙げた文獻に夫々揭示、關說されてゐる。なほ上卷の參考文獻にペロルツハイマー、中村萬吉譯『法律及び經濟の文化史的觀察』（早大出版部）を加へておきたい。

現代理學藝全書

- 21 -



昭和十七年十月十日初版印刷
昭和十七年十月二十日初版發行 (三〇〇〇部)

經濟哲學 下卷

定價一圓五十錢

著者 戶田武雄

發行者 竹内富子

印刷者 堀内文治郎

配給元 日本出版配給株式會社

發行所 三笠書房

東京市神田區西神田二ノ二

電話九段四〇一三番

振替東京二二〇九六番

會員番號一三二〇一五番

小社の出版物中萬一落丁、亂丁その他不備の品がありました場合は、早速お取
換へ致しますから、御手数をおながら本社宛お送り下さいませ。やう願ひ上げます。

現代學藝全書刊行の辭

東亞新秩序の建設は歴史が吾々に課した光輝ある使命である。これが完遂に當つて凡ゆる頭腦の動員が要求され、就中若き世代の中核的推進力としての地位は、極めて輕からざるものがある。出版文化の齎らす意義も、斯る國家的見地から、今日程重大な時はあるまい。しかも近來、用紙難其他各種の統制に際會しながら尙ほ且つ出版界は曾て見ざる好況を呈して居り、この間或は商品主義的なもの無しとせず、國民文化昂揚の上に、渺からざる問題の伏在するのを見るのである。

現代學藝全書はかかる時に當り、出版文化の本來的使命に立脚し、且つ、從來の動もすれば直譯的な文化圏に、日本的創造の生命力を附與し、以て眞に興亞の文化的前進の基地たらしめんとするものである。

學藝全分野を網羅せる本全書の編纂に當つては、各々の部門の讀書人の立場を體し、先づ在來の學問的専門の桎梏を解き、その平明な敘述と、綜合的な、體系とを以ていづれも創造的な、新鮮な知識の淵藪たり得ることに力點を置いた。執筆者は敢へて高名に銜はず、眞に現役の權威、潑刺たる新鋭に懇請し、その學的良識にゆだねた。しかして本全書独自の壓縮された端的な形式と廉價とにより、廣く一般への普及を旨とし、以て學術日本の最前線を宣揚せんとするにある。

時恰も新體制下の文化昂揚の秋、吾々のこの意圖に御協賛御支援を江湖に望んでやまぬ次第である。

昭和十五年十月

三笠書房主識

現代學藝全書 內容

*印刷費

B6判 新四六判 二五〇頁平均
定價 △印一圓〇〇 〇印一圓五十錢
◎印一圓八十錢 送料十錢

哲學・思想篇

- | | | | |
|-------------------------|-------|--------------------------|-------|
| 1 哲學入門 | 樺 俊雄 | 10 萬葉精神 | 椎崎 法藏 |
| 3.2 西洋哲學史 ^{△*} | 藤平 武雄 | 11 日本神話の精神 ^{△*} | 前澤 雅男 |
| 4 現代獨逸哲學 | 鈴木 三郎 | 12 科學概論 | 富成喜馬平 |
| 5 現代佛蘭西哲學 ^{△*} | 吉岡修一郎 | 13 心理學 | 山田 坂仁 |
| 6 現代亞米利加哲學 | 堀 秀彦 | 14 社會心理學 | 松浦 孝作 |
| 7 現代日本哲學 ^{△*} | 瀧澤 克己 | 15 宗教文化 | 熊野 義孝 |
| 8 東洋精神 | 秋澤 修二 | 16 回教文化 | 小林 元 |
| 9 日本文化學 | 池島 重信 | 17 法律論 | 木村 龜二 |
| | | 18 文化科學 | 小松 攝郎 |

126 國家論 田畑 忍

經濟・社會篇

- | | | | |
|--------------------------|-------|--------------------------|--------|
| 19 經濟學入門 | 堀 經夫 | 30 蒙古資源經濟論 ^{〇*} | 楊井 克己 |
| 21.20 經濟哲學 ^{△*} | 戶田 武雄 | 31 支那農業論 | 佐藤 晴生 |
| 22 財政學 ^{△*} | 相澤 秀一 | 32 支那經濟文化 | 森谷 克己 |
| 23 現代景氣變動論 ^{△*} | 豐崎 稔 | 33 北支經濟地理 | 阿部市五郎 |
| 24 貨幣論 | 青木 孝義 | 34 中支經濟地理 | 小林 幾次郎 |
| 25 經濟管學 | 番場嘉一郎 | 35 南支經濟論 ^{△*} | 河合 俊三 |
| 26 電氣經濟論 ^{△*} | 北 久一 | 36 支那近代經濟論 | 宇佐美誠次郎 |
| 27 協同組合論 | 奥谷 松治 | 37 植民政策史 | 堀 眞琴 |
| 28 日本農業經濟論 | 我妻 東策 | 38 現代勞働政策 ^{△*} | 江森 盛彌 |
| 29 日本農業政策論 | 櫻井 武雄 | 39 獨逸社會政策史 | 後藤 清 |
| | | 40 明治社會政策史 ^{△*} | 我妻 東策 |

— 士族授産の研究 —

- 127 現代金融論 鹽野谷九十九
- 132 南方資源經濟論^{○*} 賀川英夫
- 133 泰國資源經濟論^{○*} 吉田榮太郎
- 53 日本古代文化 樋口清之
- 51,50,49 世界文化史上中下 加茂儀一
- 54 空 海人物と其時代史¹ 圭室諦成

歷史篇

- 41 史學方法論 中村吉治
- 42 亞米利加史總說^{△*} 恒松安夫
- 43 露西亞史總說 除村吉太郎
- 44 獨逸史總說^{△*} 富田幸
- 45 伊太利史總說 西村貞二
- 46 支那史論 松田壽男
- 47 蒙古史總說 青木富太郎
- 48 安南史總說 松本信廣
- 55 源賴朝[〃] 2 遠藤元男
- 56 織田信長[〃] 3 今井林太郎
- 57 本居宣長[〃] 4 北島正元
- 58 平賀源內[〃] 5 高橋嶺一
- 59 吉田松陰[〃] 6 岡不可止
- 127 佛蘭西史總說 間崎万里
- 128 英國史總說
- 60 文藝・教育篇 鹽川鶴次郎

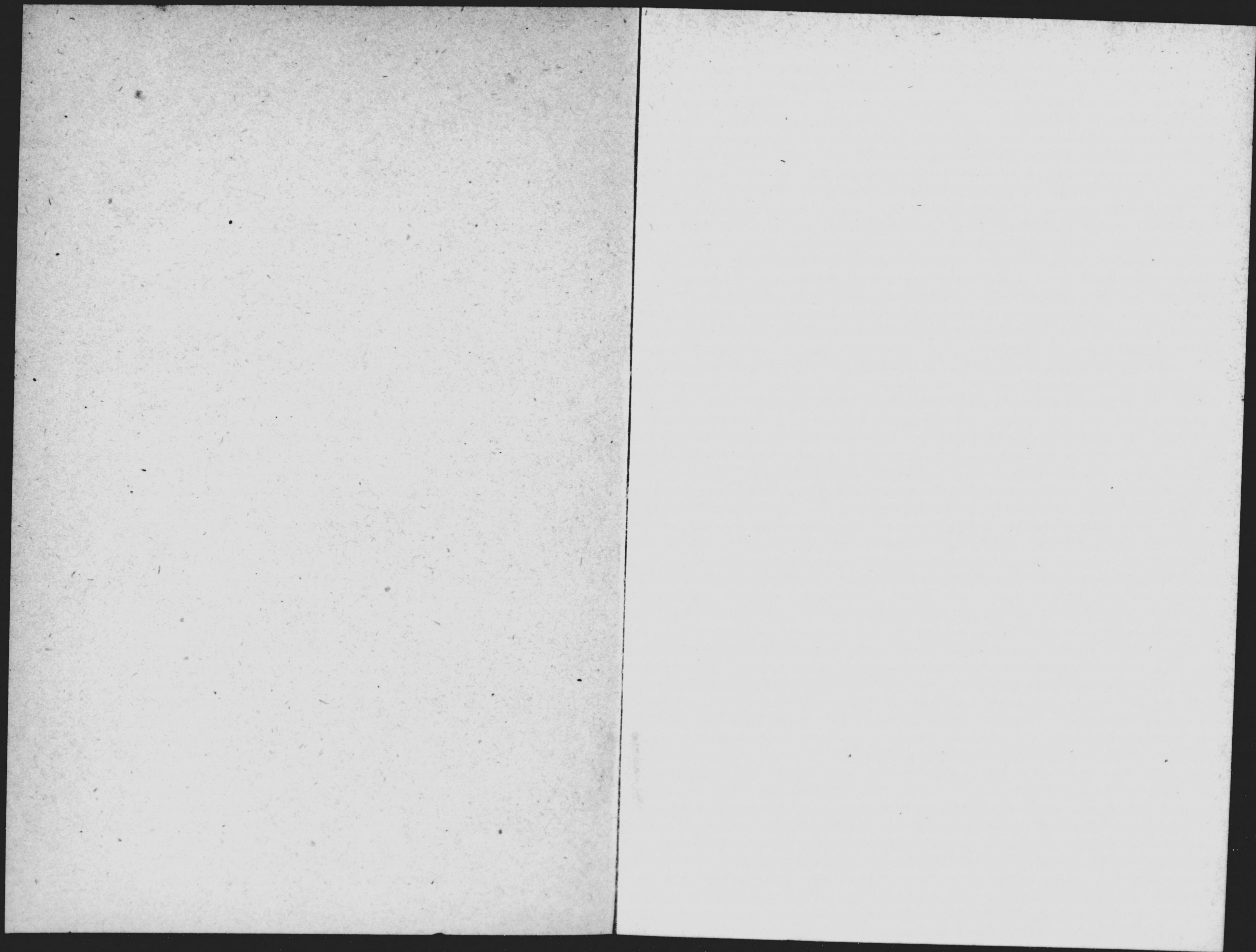
- 61 日本文學史 山本正秀
- 62 露西亞文學史
- 63 獨逸文學史 秋山六郎兵衛
- 64 佛蘭西文學史 新庄嘉章
- 65 英吉利文學史 飯島小平
- 66 亞米利加文學史^{△*} 大久保康雄
- 67 文藝學方法論 木寺黎二
- 68 日本文藝思想 釘本久春
- 69 支那文藝思想 奥野信太郎
- 70 西洋文藝思想 成瀬無極
- 71 平安朝文學論 川崎庸之
- 72 室町文學論 渡邊保
- 73 江戸文學論 稻垣達郎
- 74 小說論 阿部知二
- 75 藝術學 鼓常良
- 76 現代短歌文學論 渡邊順三
- 77 現代演劇論 飯塚友一郎
- 78 現代映畫論^{△*} 北川冬彦
- 79 映畫技術論 河邊照男
- 80 日本繪畫史 谷信一
- 81 日本工藝史^{△*} 滿岡忠成
- 82 現代美術 瀧口修造
- 83 音樂概論^{△*} 守田正義
- 84 體育舞踊 石井漢

85 現代教育學
 86 兒童問題 野口樹々
 87 幼兒教育論^{△*} 市橋善之助
 88 日本兒童文藝史 菅道忠
 130 兒童心理學 山下俊郎
 97 自然科學的世界像 平野次郎
 98 地震學序說^{△*} 宮部直巳
 99 進化論發生學
 100 現代實驗理化學 白井俊明
 101 原子核物理學
 102 現代工業概論
 103 條件反射學方法論^{△*} 林 謙
 104 精神病理學 式場隆三郎
 105 環境的人間學 巴陵 宣祐
 106 現代生理學 林 謙
 107 現代生物學 篠原 雄
 103 文化と生物學^{△*} 佐藤隼夫
 96 一般電氣理論^{△*} 吉松氏吉
 95 理論物理學^{△*} 石原 純
 94 數學概論
 93 數學發達史^{△*} 稻葉三男
 92 技術發達史 小山謙吉
 89 科學思想史 森島恒夫
 91 科學思想史 森島恒夫

自然科學篇

109 優 生 學 大行慶雄
 110 生物學史 永野爲武
 111 古生物學 西三省三
 112 發生學史 元村 勳
 113 生態學 石田周三
 114 下等動物ホルモン 永野爲武
 115 血液 谷田專治
 116 病理と豫防醫學 原島 進
 121 入門西班牙語^{○*} 笠井 鎮夫
 121 入門英語^{○*} 清野暢一郎
 122 入門伊太利語 下位春吉
 123 入門支那語 杉 武夫
 124 入門蒙古語
 125 入門馬來語 朝倉純孝
 131 入門サンスクリット泉 芳環
 132 入門ビルマ語 太田與一郎
 117 入門獨逸語^{○*} 石川 鍊次
 118 入門露西亞語 除村吉太郎
 119 入門佛蘭西語^{○*} 山本直文

語學篇



87 6 27

27. 5. 26

